都名所圖會

石白庵
再刻

日野
書林

都名所圖會卷之四目錄

右白虎

月輪寺　時雨橋　高野瀧
朝日峯　白雲寺　日暮瀧
清瀧川　濳城化野　搔ゐ原　失伏権現
三宝寺　歌石　小倉山　念佛寺　住生院
時雨亭　厭離菴　二尊院　法金剛院
愛宕山曲龍圖　長明神　定家の古跡　為家の墳
清涼寺　濳城帝塔　西行古跡　車僧塚
大澤池　菖蒲池　名古曽瀧　融大臣塔　大覺寺
　　庭湖石
僧正遍昭古跡　通昭寺山　相澤池　廣澤池
野々宮　常寂寺　千代古道　森の聲吟碑
薄馬場　亀山　芹川　歌詰橋
　　天龍寺　嵐山

大悲閣　大井川　淺月橋　千鳥淵
いるせの滝　小督塚　滝川寺　有栖川
法輪寺　西行櫻　櫻のもと　車折社
帷子辻　安堵橋　常盤杜　右泰廣隆寺
牛祭圖　本尾社　地藏堂　海生寺
梅の宮　梅津川　西院春日社　松尾社
葦うりの家　月讀社　華嚴寺　衣手杜
葉室西芳寺　地藏院　唐櫂越　澤住寺
天龍森　上野橋　桂川　桂の里
久遠寺　大江坂　時鳥圖　此地藏
大原野春日　花の寺　臘清水　日野嶽
西行櫻　せごいの水　翁の瀧　長岡都
楯社　西岩倉　三鈷寺　覺嶽

善峯寺
業平母公塔
辨天社
唐橋
貞徳翁墳
法傳寺
琴淵橋
羽束師森
乙訓寺
楊谷観音堂
帰海印寺
観音寺
宗鑑古跡
小塩山十輪寺
朱雀権現堂
西寺古跡
吉祥院天満宮
地蔵堂
樫大路 牛車圖
鷺尾寺
向日明神
栗生光明寺
長岡天満宮
山崎
八大天王
関戸明神
在原業平塔
源為義塚
小柳塚
鳥羽里
こい塚
久世里
福田寺
真経寺
奥海印寺
小倉明神
離宮八幡宮
妙喜菴
谷観音堂
埋蛍古跡 柱溜池
水薬師
松尾祭礼場
實相寺
乙訓社 無塚寺
藏王寺
板井清水
寺戸願徳寺
寂照院
圓明寺
宝寺
天満宮社

月輪寺
白石
本堂
日暮の滝

愛宕山
月輪道

日光

愛宕山のやゝ北に王城の乾のかたに朝日嶽白雲峯と號して高くそびえ坂路六十町ありてそこに試の峠あり清滝川渓流急にして十七町目に巌の高い小の藁屋あり南星峯といふ乾よりこの嶺にいたる鐵の藁葺て額に春と朝日山裏を白く書きつけたり法親王の筆なり

降ることうるおのみ雪解ふゆり清滝川の水の白波　西行法師

岩根おひし清滝川の早くだいば波ゆりくる岩れ山哉　権中納言兼房

時雨ふる白妙ふれもあくぬ山桜の糸はいろいろ涙　藤仲

本殿は阿吉その山権現ふして奈所に伊弊冊尊火産霊尊を奉祀る将軍地蔵を安置し帝都を守護神として火災を永く退のぞく

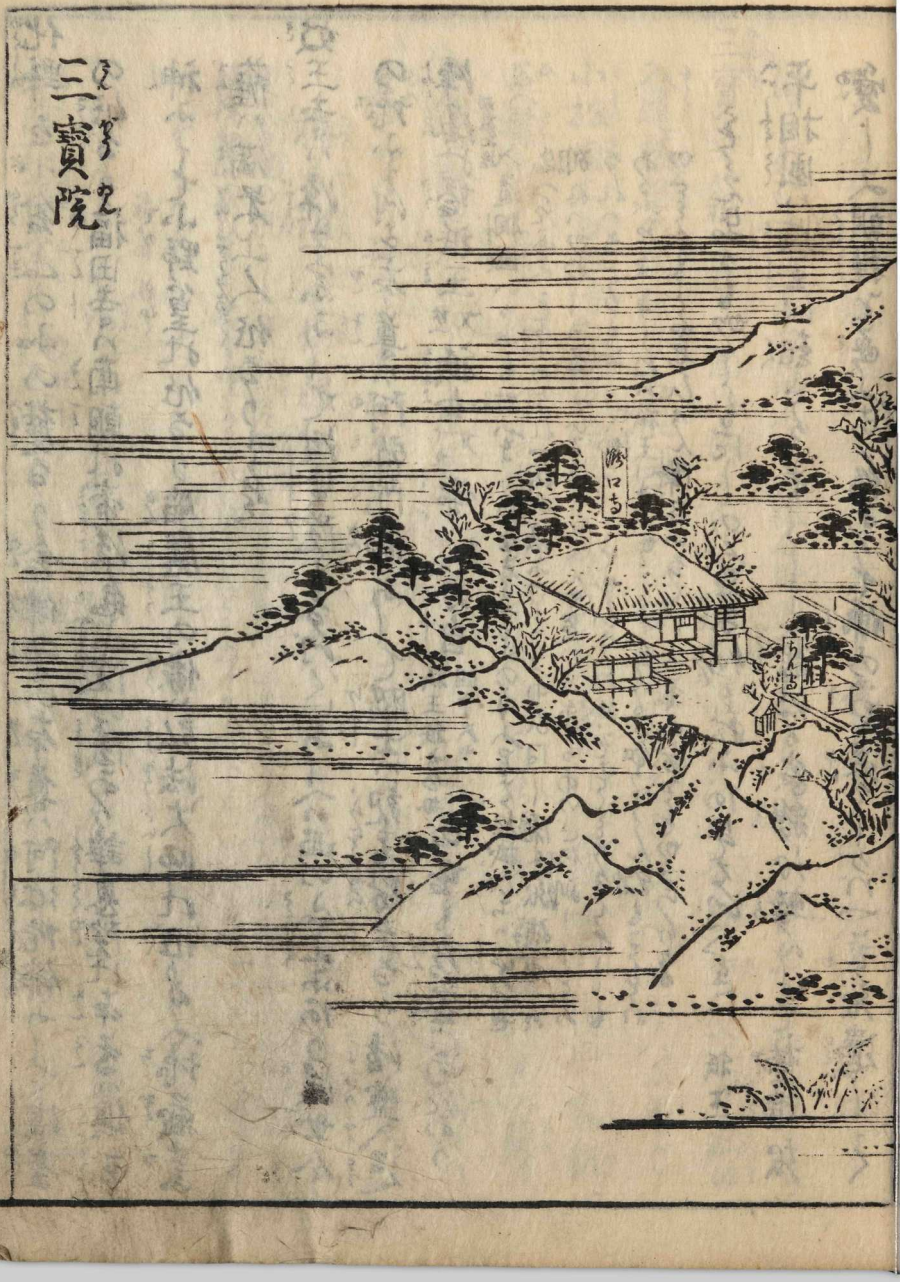
久代を鷹鳥の峯もかくにありしを光仁天皇の御宇天應元年に慶俊法師といふ人ありしを勅諚ありて

元年役小角泰澄の両聖人の悪鬼を退治せられし山なり

愛宕山のつゝみ黒雲鑁く絶を両聖人ふかく封じ黒雲ふかく零て白雪ふる故に白雪峯

詞ぶれ尊像は甲冑帯し将軍の形ち現じ

往生院
姫王寺
念佛寺
福田寺
平山


三寶院

化野なる小倉山の小の麓なる念佛寺の本尊阿弥陀佛みて湛慶
の作なり福田寺は南朝より帝後亀山院の陵ある諡恩院は本尊は俱生
神みて小野篁は作なり焔魔王の像は弘法大師は作なり地蔵菩
薩は満米上人作なりとぞ
妓王寺は浄土宗みて往生院とぞ号くみへ西の山上ありし昔今
の地ふりをは本尊は阿弥陀佛みて脇士は記る勢至なり清盛入道
浮海は塔祇王は祇女は十九は佛は十七は刀自は祇王祇女の母
四十五は
入道相國いかゞ
なまじ
いたはしさ
の塔も存在れてあり
出つれ
あらそ
ふべき
一枝の花ぶやどりあひは
別れ
いかゞ
きゝ
ふしそう
いそんや
足いこ年
あいご
住
ありし
ありし
ありし

さくに張る綾の錦れ粧をまく紅葉ぞ散ふりそゝる佛も我身のうへの秋ともおぼしめしけん四人も道心堅固ふをねがひ給ふこと目出度義なりけり

三寶寺は祇王寺の南に隣るも生佛院とぞいふ本尊は阿彌陀佛也

入道樣御墓の傳說安元の頃墓地に良鎭上人と歌石とふ門のまへにあり

小松内大臣の侍士瀧口時賴ふかき歎ありて高野へ登山し給ひ其後熊野へ參詣し給ひて那智の濱にて入水し給ふと世俗に傳へ出來れりしかば樣子は更に知れず

瀧口は

是は當院の說なれども石に彫刻せる平家物語には瀧口滑瀨を登り高野へ上り清淨發心ありて後熊野へ參詣し那智の濱にて入水し給ふと書たるを

そのまゝにうけとりてかくも梓うはこれをふかくとがめしさ

瀧口

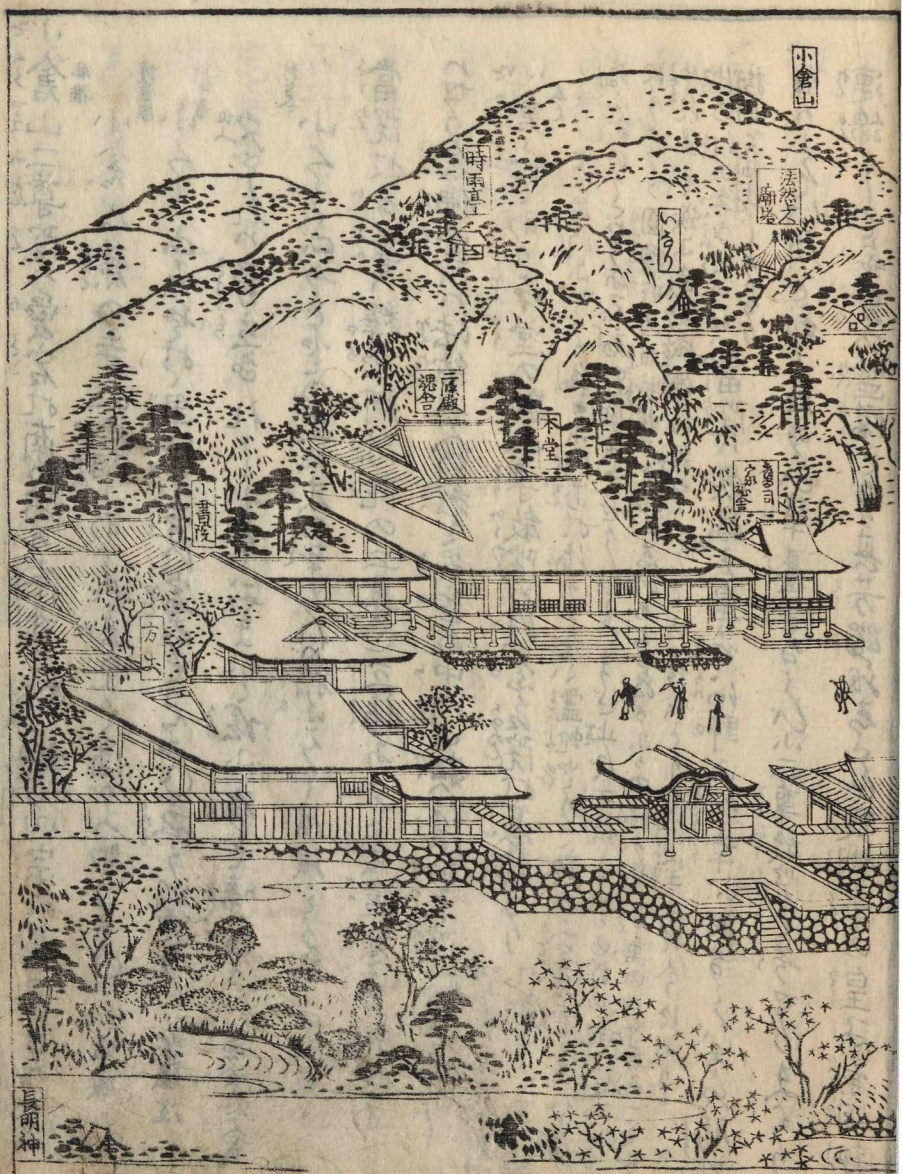
梓うつそもかうかうあやまりとぞむさかうそうわを

樣子

其後樣御墓の事ども此ほとりに傳へ聞ふるまゝ書つゞけ樣子もつくるものなり

二尊院

古今
夕月夜
小倉の
山の
嵯峨の
里の
秋の
ゆふ
風之


小倉山
時雨亭
法然之廟堂
いろり
渡殿
本堂
小書院
長明神

小倉山二尊院八愛宕ノ南ニあり宗旨ハ天台真言浄土四宗ノ兼学ナリ

風雅　小倉山蘇の生れ入相のねるゝ〳〵はゞ人のかりごゑ　俊成

後撰　小くらやまとをき里のくさ深く宿もそよ〳〵夜ぶかの雨　順徳院

新千載　久ざれい雫ぞ袖にもりくる小倉山やまれに法の雨を聴ても　後宇多院

小くらやまとをき里に木のはちれば拾ふそ見ゆる式　西行

當院ハ本尊ハ釋迦阿弥陀ノ二尊ニ立像ニテ發遣来迎ノ相ヲあらハせり念佛堂ニハ法然上人ノ影ヲ安置ス中門ノ額ハ後柏原院ノ宸筆ニテ

小倉山ニあり本堂ノ額二尊教院ハ後奈良院ノ宸翰ナリ此寺ハ嵯峨ノ内ニテ二尊教院ト書ハ七四足門ニかゝる額ハ後陽成院ノ宸筆ニテ額ノ文字ハ掌ヲ以テ書ル故ニ掌ノ文字ト云傳ふ門ノ左右ニ仁王ノ像ヲ安置ス此仁王ハ運慶ノ作ナリト云傳ふ門ヲ入ルト左ニ地蔵堂アリ地蔵ノ像ハ定朝ノ作ナリト云傳ふ其ノ前ニ圓頓戒ノ血脈ヲ置ク此ハ傳教大師ノ御作ナリト云傳ふ其ノ前ニ小野道風ノ筆ニテ法華経ヲ書ル額アリ此ハ嵯峨ノ竜女成佛ノ趣ヲ書ルトソノ右ニ弁財天ノ社アリ此ハ道風ノ信ノ弁財天ノ社ニ當院ノ境内ニ天皇井ノ跡アリ此ハ後嵯峨ノ天皇井ノ御所ノ跡ニ殘ル井ナリ

ふるき跡ありとも見えぬ苔の色ハ猶ふかき世の名ハのこれり

連綿ト立並ヒタル雙ノ靈場トゾ云芳踏松ハ醍醐帝ノ皇子兼明親

王山かふろに山荘を営雄蔵殿と称し其後星霜かさなりて中興八代結城人国
居一のひえ元久元年十一月七日一宗規範の式七ヶ条の起請文を制せられ自筆
と深く判形をそへらる當院第二世信空上人をそのめ西山上人等百八十九人
記すにはせるおのく自筆の名をしるし給ふ然るに三部直実も九十人目に
出そ法名ハ蓮生とそ記せられる又林霊山念
仏と号ふ去程に上人は舎利ふつるを式を作りて日佛の平尼の夢に教へらるゝ様上の一
利と信じ給ひ七万遍の念佛を修して板ふ多年ハ星霜かさなつむ次第なの経
いまこのこすゐおれ足利尊氏の
恩徳うるわしきをとそ云ふれる
足利将軍影具傳ふ曰月輪禅定殿下法然上人ふ帰依の志深く尊敬乃
あまり上人の真形を写さんを仏ふ上人のく辞して退出せらるゝ其後上人
石清水八幡宮ふ詣浴室ふ入沐浴ありて水を呑ふ念仏ふ休息の間画工法眼
宅磨吉ふありて簾中ふ窺ふ為ふ真形相ふうつさせらるゝ上人ハ
坐ふのそ一方の足先出さるふ只ちらくあるのみふ画せらるゝ上人ハ
気ふもあへ殿下ふ毒像ふかけて両眼仏書ふ写ふ上人ハ踏ふ仏足乃
出さるゝ平懐の形ふうつそ持念せらるゝ上人ハ忽然として真足引れ坐

せうは姿とうる足偏ふ上人れ奇特み繪師れ名譽うりそへこ奇異
のこと紋ゐーふる足より足引の御寺と称しる
法然上人れ第二世正信房湛空を徳大寺左大臣實能公孫と葉括
真源院殿ふ志源うりれ淨土門ふ入って當院を再興ー土佛一體後嵯峨院
二代の國師とうう實喜上皇御帰依れ勅命ふ依り也佛遺骨や當ふれ佛
塔ふ納め奉る當ふ西のとよこのあう三世正空上人も後源卿院亀ふ院後宇多院伏見
院れ國師うり當院の縁起い伏見宮貞敦親王西ふ條公條卿の両筆え
外題い後京良院の宸翰みて画い土佐光信うり大聖文殊の三衣傳
教大師の五條袈裟慈覚大師の二衣皇慶阿闍梨の袈裟あり
教大師の護法神現れくえ空と世熟ふ真外五鈷等伏ふ院うれ佛書附
ふて傳ひーこふ大部ふ袈裟石あり
くって當院の什寶うり
黄門定家卿のふ荘うふ旧地い佛殿のうーろれふ脇ふありかの卿より
代々の當院法堂親々うり後世小金ふ小書ふて号るあれ

厭離菴

定家卿古跡

あくご糸の皿
竹輿とのりて
紗をうちそれを
をとめ
桃盛っと
ゆふ山路く
おのりて
山をさろした
みちよせ松
舜福

檀林まとうへいむ寺檀林皇后草創之ところ後深草院御願勅
額金剛院と改ら
亡慶して此地よ深金剛院を建ら今ハ二る院れ
つくまつ
深金剛院のひと英俊調ふりとうけ
長明祇園やしろ記ハ二尊院大門のまへより初ふり参の所ハ檀林皇后ハ髪え
とうひ侍へ又日嘗宮ハ此南二町ばかりふあり皇后の維摩をふるとう
裏御れ社ハ大門のまへ中院町ふあり上衣れ散り所ふりとそ檀林
皇后嘉智子ハ後橘氏ふれ寵愛ふしく西施毛嬙ふも劣ハ美人え
堯ぶのへ後戀慕愛執のふひ仮離散させんとふ遺命ふふり後
峨野へ葬ふ捨る具ふ散る所ふやしろ仮建へふるふへ
くそ
西行法師の居れ記ハ長のやしろれあれあり
我ふのへ秋の指仮そふる小倉ハ里ハ家居せしふり　西行法師
車僧の塚ハ二尊院のまへ数の中ハ一堆の所ふりむうしふまハ仮数ハ

京極黄門定家卿の山荘ありしが時雨亭と號る處ありこゝ
かの卿の詠ありしとぞ
時雨ふるみねのもみぢ葉いかばかり
いくしぐれのふりて世ふりぬらん　定家
此外を種々にして謡曲を作したり小倉山山荘ともいふ清涼寺西の門より
時雨亭迄も凡そ十丁ばかりあるべし
二尊院までの道二町ばかりは民家の所を中院町ともいへり
院あり今殿そは半を小へ入る細道あり竹林なびきのこれりて東山の人
所あるべきなり
ふりぬ猿離庵とかいへるの四ツ柳井水とかいへる清泉あり草庵乃
外に西北に高くして中頃より愛宕大善院
此頃を西北の方
此頃を
此頃を
此頃を

明月記 仁治二年 訓曰去頃元久住吉歌合の時後鳥羽院より
まゐる 仍りて家隆小倉の山荘に参向し和歌の事を談ず
彼記に曰 文暦元年五月廿七日己未朝天晴 自不知書事況
色紙形故予可書由彼入道懇切雖極見苦事懃染毫送之古来人歌
各一首自上天智天皇以来及家隆雅経卿
小倉山百人一首とは定家卿の撰みて山荘の障子に
ぬりたる和歌を一人一首づつ撰出したるなり 一説には新古今撰集の歌
撰をするに又一説に唐の賈島が岳陽楼の詩賦をきざめるなど
お合のれしるぞなどいふ百首百世ともに
更に他人の詠歌を入ず真跡の色紙ばかりを
集めたる 圓珠庵雑記
定家卿の墓は嵯峨菴の前面の中にあり 仏中院大納言
為家卿の墓 小倉山陰も方いもをへだてもせず苔ぬのそれやこの
行そめし秋のもみぢ葉心あらば今ひとたびのみゆきまたなん 為家
定家卿葬送の時
ちぢの秋のさかりの風ぞ吹く 入道前参議
下冷泉宗家卿
中院入道殿 寛永十三年四月廿九日亮記之
定家卿為家卿 御父子の旧邸山荘ともに決せり是を以證とすべし

清涼寺

方丈
聖天
本堂
五大堂

五臺山清涼寺に於いて感応せられ東土
[illegible]
本尊は大聖釋迦牟尼佛の立像にして長さ八尺分毫も異ならず
脇士は十大弟子の立像並びに安置して東西に壇上に於いて
[illegible]
[illegible]
作此尊容は二國王雙の靈佛にして釋尊在世にありて
彫刻せる像
彫り如来の御母摩耶夫人釋尊誕生まして後七日に薨じ給い
[illegible]
天に生じ給へ釋尊成道ましまして祇園精舎にて
[illegible]
のたまう二百九旬の間ありし時四衆の中釋尊ならびに
[illegible]
給う優填王は
[illegible]
[illegible]
梅檀にて
[illegible]
相好具足し
[illegible]
居の御法ありて本土に帰らる
[illegible]
[illegible]
[illegible]

宋の代至ッて本朝一条院の御宇永延元年南都東大寺の流徒法橋奝
然渡唐し靈告を蒙りて此尊像を感得し帰朝しては年八月十八日
天聽に達し伽藍を建立し清涼寺と號す以上抑元の
阿弥陀堂 本尊の阿弥陀如来は宋の皇帝大宗より賜はりし瑞像なり
本尊の脇士観音勢至のこと尊く擅像瑞像 帝の勅宣あり
ありて之れを彫刻して造り終ッて五大堂 釈迦文殊普賢不動
両の脇士を加へ五大尊と号した 五大堂の後ろ中央に三尊四菩薩
勅大威徳軍吒利 二重塔 本尊は多宝佛を 三石塔 五大堂のうしろ
のこる 弘法大師 八宗論 弘法大師と法性の御ありし所なり
八宗論 弘法大師と法性の御ありし所なり 掛硯 此の傍ふかき所
山椒 一四ッ足門 西の門をいふ 本尊 建立の時一七日参籠
ありし所なり 一四ッ足門 西の門をいふ 夜の夢に本尊告て曰
ふらく汝今より今牛をとるべからず速に放ち 牛とりの
ものに放ちて佛景を降せしめよとありしかば 牛とりの
にあいて悲歎してその牛を元のごとくかへしぬ三月十九日
下ふ葬ふりのゆふ四ッ足門といふ 真牛の像をうつせり如来の
富寺の仏 大念佛 毎年三月廿日より十五日まで 身拭 三月十九日大念佛のうち特に集して如来の
御身を拭ふ 身拭ひの時小袖のやうなるものを着せ 御の月
寂道法師

大澤の池 潜深まの良ふあり菊が浦とふ池の中洲に天祖社やしろあり
けゆ今も祭酒 庭湖石 ふるそれ池中ふあり 弘法大師
いくらへ 大澤の池れそ〳〵たふりけとのふるにする秋の夜の月 信実
大沢れ池のみとのみくれ雲 五月雨のころ 慶光
五所明神の社ふ大沢の西ふあり久古名勝ふ真ふにあり 新撰
遊れ者ふて久〳〵くりめしと名ふ流れて狩へくれ 大納言
小閑とふふ桜れ雙樹あり 今ふ人家
大堂まる宮ふ真言宗ふて佛殿ふふ五大尊弘本尊ふた弘法大師れ作りふ人
ふ開基ふ恒寂法師 淳和帝第三れ皇子ふり 代々法親王ふ住職ふふ 後醍天皇の故宮ふ精舎ふて
大堂まと号ふた菖蒲谷〳〵ふふ大堂まれふあり 小松中将惟盛卿の君達ふ代沸前
ふれ実検ふくろ ふの方城君ふと ふくろにふんで
おり 八角堂ふ大澤の西ふあり 浅草多院の陵形り 内ふ五輪のふ塔あり 昔ふ
所ふり 庚沢大沢の 長刀坂 真ふふ 僧正遍照れ句ふ
真ふ名を 相澤池 中ふあり
ふ
新撰
名ふふ秋のころれ〳〵 のれふふり源ふ春ぞこがく 忠定

大澤池
大覺寺
後拾遺
一なと
そひし
菊花
大沢の
池の底
ふかも
猶ふうえん
友則
名古曽滝
大覚寺
三笠明神
菊嶋
天神宮
猿沢池

廣澤池
遍照寺旧跡
登天松
座禅石
千代古道
足形池
千歳の井

後拾遺
こゝろ浪の月
こそよする
行人も
山里の
秋の
夜の
月の光も
さびしかりけり
藤原範永
八角堂
児社

廣澤池の大澤也望の景朝僧正此池をたゝりゆふとう

風雅　廣澤や池の堤の柳かげ

物思ふ程の風吹ふきにけり

後拾　ふの場小橋をわたる秋の日のうつるともなく

新千　いつくへの人の行ゑぞ

中秋の月みんと都下の貴紳此の汀に臨んでよりをつらね盃をめぐらし千里故共みてくまなき空なれども月も宿る廣澤の池と詠しも今さらにおもしろく物思ふく風の纖雲吹拂ひて澤く冴る月影ふ降りて寒し謝莊の月賦を誦し庾亮を南樓ふ登る和漢中秋の風流賞ぞとゝもに古今ふ多し

遍照寺ふ此の乾ふ向てゝゝ

遍照寺ふ此の乾ふ向てゝゝ

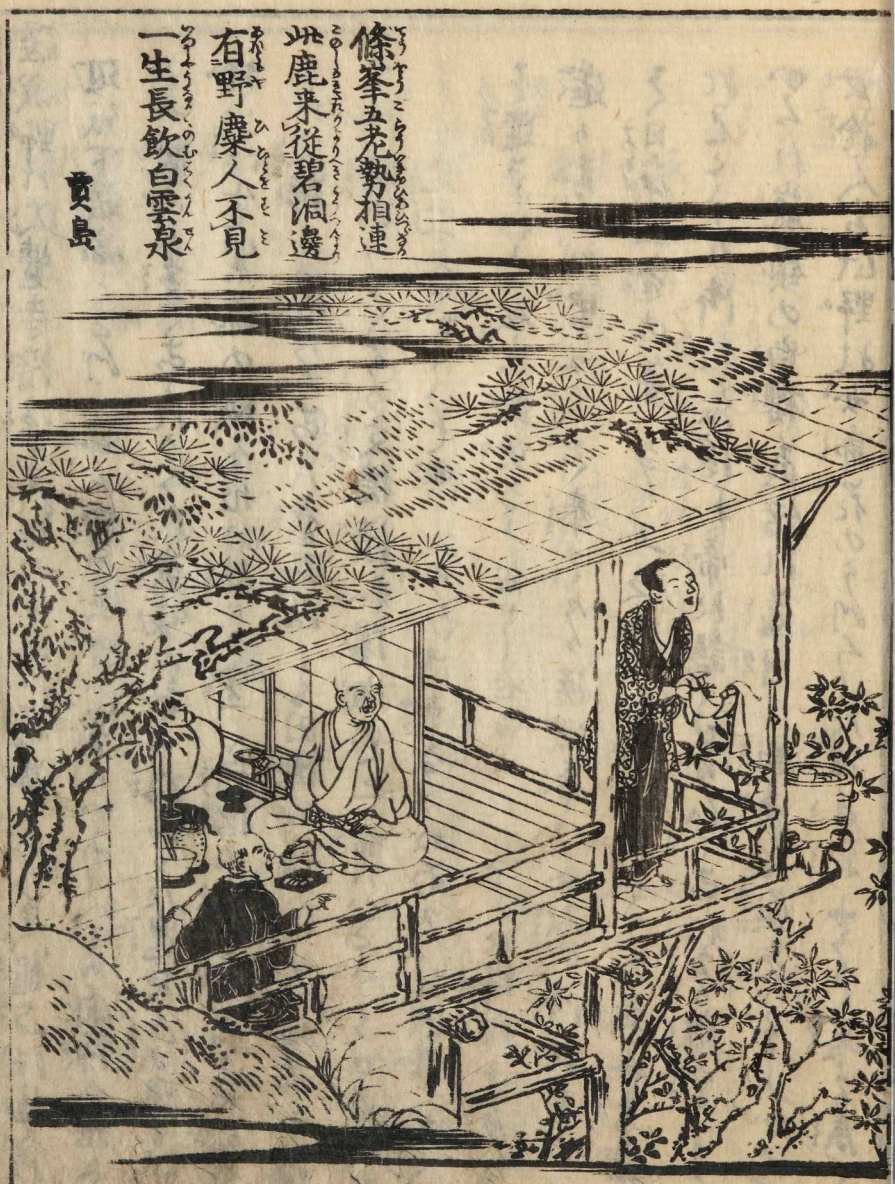
真言奥旨弘法遍照寺の四方八ふ禁ふあり本尊十一面観世音赤不動共ふ弘法大師の作ふ今此の裏村の坐禅石遍照寺ふのふ賜りあり寛朝の坐禅し

ゆゝ人登天松 はしさゝの瀬ふあり池の汀なり又のあり 佐古曽の水 池の西のくふ
所ゝ 寛朝ゐ松の根より天ゝ登りしとぃゝ
して芦 観音滝 池の南ふあり 遍照寺より呪のやしろ 池の西ゝの
ふうり 橋ありて絵まきあり 傾ふあり
寛朝僧正の常ゝ傾ゐて ゐへ〳〵 呪ゝ寛朝 登天の後 呪ケ石 坐禅石の
悲泣して終ゐゐ池ゐゐ身を投てゐを ゐへ〳〵 下ふあゐ石
ふうり 寛朝坐禅のふれ 呪ゝ石ゐ 鉋殿 呪のやしろの傾池の汀ふあり
頭ふれく眠るとぃゝ 呪ゝ童の ゐ所ふゐし
鉋殿橋 池のふーの 大道法師定敷池 廣沢の裏ゝ町 屏風岩 廣沢
ふうり 橋ふゐり ふうり ふうり
呪縄ふゐり 青頸山 足敷池のふーの 千壺の井 呪樹 繁廣ゝ
ゐのふふあり
不ふみて ゐふ入ふくさゝれ石 呪滝 通のふうり
井に呪ゝそ 南のふあり
千代の古道 廣沢のふうゝ町ふりにあり
常盤へ通ゝ細ゐうり
千代の古道の石ゝ名所ふあゝふうゝ名所の荘書ゐせふう
廣ふ定家卿為家卿ふうゝ 定家卿の縁合ふ古ふ 縁ゝふう
ふう名所ふあゝふうとぃゝ 真澄あふ池
帯ふう池 廣沢の ふがゝ滝のふうゝにくふこふ所あり 是ふうゐうゝ
いと深くて ゐ池の霊常ゝ化して人をふうしふそ
志ゐゝ八が谷 的野 仏翁洞 野依 ゐ色にあふう
具所さふう滝
源草里 源満寺の ふがゝ重 今ハ呪ゝとぃゝ
土ふつゝの住ふう具人の氏を源ふしとぃゝそ

新古今
下萌草
みちの
ふの
タ〻くれ
ゆれてゐる
ひとり
靡け
ゆうべ

條峯五老勢相連
此鹿来從碧洞邊
有野麋人不見
一生長飲白雲泉

賈島



渡城野の大慶寺清涼寺よりうち松小清涼ともひ天龍も渡船
迎船下渡涼ともひく野く宮の真中遠うりいみしくへうり雨降の地ゑ
して故人も多くまたうくれ秀吟もおのおの遠き涼順も此
地ふかんて紫藤の賦を仙の揃墓室く宿侶の室ゑのぬ公敬ゑ
しい文粋ふのせうまくい舊野よしも田猟の地ふいく清涼帝御
て御狩おうくうり文徳清和陽成のこ二帝いおくうりせゑひ
しが光孝帝かうの興しゑひ御幸うりぬおうしい此野へ女人
を遣さしむく松虫鈴虫ゑうゑせの人に具うた野に虫屋ゑ
造りまよ此虫ゑ撰く奉うう渡城寺ハ亜欧の御統書ゑ
く日本二冬の第一うり又詩文ふも達しのうまる文武秀藤
にんこうり御位ゑ譲和帝に譲うせのひておれうり離宮う
かうれ嵐嶺の白櫻毫緒れ落ゆふ厳魚ゑ慰免うう人かの
世於人ゑ此野れ女帝花のうしくおゑゑ打ゆうく馬より高て

よめる

左大臣

名ふめりくゝ却るたりと女郎花我前ゆくと今宵哉

僧正遍照

三条

吟り人の草名を尓しもおふ秋はさ野辺を四方の里

順徳院

長久二年八月松尾社行幸ありける日女房車
小草の花尓かさして帰るさくらへ小さゝくて物見
侍りける処にて
車のそやをふうちよせてうつみ侍りける

後古

うちつけくゝ袖こそ露けき花落ひるかくれゆく野べ尓

中納言資雅

新千

絶せじ尓浸れさるれく未とをくてこの法の流のまゝに

亀山院

うくりくる山世のさくれ秋の雲ゆく時雨もあるそくるん

法皇実兼

嵯峨十景

春岳晴雪　難瀬飛瀑

愛宕雲樹　五墓晨鐘

嵐嶺白櫻　仙翁麦浪

雄藏紅楓　遍昭孤松

幡山霊社　亀緒落月

野々宮（ののみや）

野宮を小倉山の巽なる麓の中にあり 源氏物語 賢木の巻 并小式部内侍
歌枕名寄 黒木の鳥居 并小芝檜垣 いつきの遺風なり 伊勢を神宮へ
称宮ふ立せ給ふ 因縁 王氏所ふて之を立なり 後醍醐天皇
御代 文保のころほひ 亀山院の皇子 皇女 惟良親王 惟娘命 野の宮 別宮
例ふよりて九月上旬吉日ふト定して伊勢を神宮へ
向ひ給ふ 後宇多院の御宇に此事絶ぬ
ゆゑふ称光院の庚申に後花園松殿へ渡御 琴を
弾をよこなる
琴のねに琴れ松風かよひこつれのをとをもくべ初なん 称光院御製
松風のをとたれて琴の神代をけふ日のかちまでそきく 全
雪のあしたに宮みて
榊さす雪のかたはのかたくふ枯うけそふる雪れ白ゆふ 後花園院
王妻 をぐら沼八十瀬の波のうちもそ深くぬ神のねもくひの卵 契子内親王
常寂寺を野宮の西ふあり 法花宗なり 開基ハ日禎上人なり
本尊ハ釋迦多宝の二佛 之定家卿の社ハ南の山上ふあり 新し彼卿の山荘のうし
ちてある 僧院の小督局ふ 楊人 琴といふ名琴あり 後代ふ至りて
金吾秀秋のもふあるしを当寺ふ寄附せりと

常寂光寺

芹川の野宮のあとを流れ来る大井河ふかき小川ぞわたる

殿ども沸所あり龜山院幸ありし所なり

芹川當麻の中に二ヶ所あり和名抄

芹田の芹川なり

詠

歌詰橋の天龍寺のまへ芹川の流れふかくも橋ゆ西行法師

此所なり通りたるもしるき寺号なるべく私かれ給者歟首

あり後小西行庵ありしよりの號るとぞ

薄馬場の天龍寺は東藤王院のあとにあり

今の辻子

龜山の天龍寺の西なる山

龜の甲に似るゆへ後號る

龜山帝

離宮なりしとぞみえ侍せめて旧跡ぞ

注書

龜山の仙洞ぉぉ堰の山の掛松あるべしと

侍しが見さだめ侍らねど

春おそくふかやれそめしの花ざくらを富小路なれ

後土御門天皇

かめのをの滝つ波もちりそめて秋の紅葉乃庭

大納言通秋

新千

子日もるいづくいはれと龜のをの岩ひの松をたのまそう

高家

天龍寺

亀山
昭堂
方丈
佛殿

霊亀山天龍資聖禅寺は五山の第一なり大井川のほとりにあり厩峯と
爰窓國師謀は智曜又疎石と號しあるひは木納叟とも称た勢州
の人なり姓は源氏にして宇多帝九世の孫なり母は紀氏にて
金丑の光西なり来る夜吾よく爰にて妊し十二月みごと誕生た
四葉みるく母みめくれ九歳のころ平城教院にゐり出家し十歳ふ
して法華経を七日に誦し母の恩ふ報じこゝろざす母の死屍九変れ
相好画て独坐観想し十八ふゆり芸観律師に遭ひ具足戒をうけ
三年の間屍窓の教をうけしかのみならず大道の發明ふ日々にと
て道場を建百日聖衆を求めくれしに期満の日ゐて空中光彩と
して爰の如く光ありて一僧来て爰窓をみて一寺ふいとなむ好地石
ありや又一ありあれ石頭といふ其国ふ一人の長老あり爰
窓好むと指ふる一軸をあたへてよく奉持しめよといふ語て後爰
窓まれ好みきこえるま遠ず其の画像を求めより志好宗先

禅趣ふ帰し名ふ碑石とあるこの字ふ若宮とふ紀應二年九月二十日
七十七歳ふて寂しの当寺の本尊ハ足利尊氏公後醍醐帝追福のふ
御建立あり(こいみ)ふ極楽あり荒廃ふそ其後後堀越完亀山院等仏閣とん
とるこ右脇ふ擬宝珠(ふ)(ふ)(ふ)

嵐山
法輪寺
渡月橋
座禅石
藏王
扇流
渡月橋
井川
仲國塚
川寺三會院

玉葉

うたゝひ
あるしの
ふれ
みゆきする
松の戸ふ
有明の
月

俊成

嵐山を大井川を帯て小高く向ふに見る山なり　亀山院右筆の掛をうめり

新千　あらし山見もうき世をうつせかし掛ふかゝる滝の白糸　後宇多院

新古　さひしかる人も嵐の山おろし独そうき有明の月　法印静賢

後十　あらし山麓の花乃掛ごゑにふるる峯の白雪　前大納言為氏

藤谷やしろいあらし山の麓ふかき松尾七社の内なり

戸難瀬瀧の藤谷の西ふかき大井川ふ落るを大井川の一名とも名ほゝ

玉葉　とゞめ置よき流を添て大井川行ゝとめる木葉なりけり　後嵯

後千　峯おろしを洗ふ滝の月なれや秋ふかきそふ瀬の音　定家

坐禅石あらし山の上ふあり春窓園吟嵐山城峯ふ城ありし細川右京大夫政元の

坐禅石なり坐禅しやうしやくし

藏王谷城の西ふあり古城山なり

藏王権現城ふ安置ス今小堂あり

永正年中に藏王権現城ふ安置ス今小堂あり

築く所なり

大悲閣をあらし山の麓ふ道ありて渡月橋より七町ばかり西なり

本尊観音の立像ありて恵心の作なり角倉了意の碑あり羅

山子ふれ板擲ち了意ハ大井川の巌石ふ截て小舟なり舟代を

通り材木の筏なり板自由す

智福山法輪寺は渡月橋の南にあり真言宗にて本尊は虚空藏
菩薩の坐像なり　道昌法師脇士を明星天雨寶童子なり
の作
天狗は猪のそぐるも嵐山をふきへてをるなり　高道
本當寺は天平年中の建立にて葛井寺とぞ　慶の作空也上人ここに住して
書寺と修造　一念佛常行堂あり
中興の開基は道昌僧都姓は秦氏にて讃州香河郡の人なり弘法大師の
真言の密法をうけ虚空藏求聞持の法を修せんとて此山に百日參籠
せしが五月の夜皓月西山に傾き明星東天に出るを觀じ忽然
光炎頭に耀て明星天子衣冠袖のうへに虚空藏菩薩と現じ
縫のぬくが如くぬくと教ありしかども其體滅せざる生身の尊容なりと
道昌則虚空藏菩薩の像を刻み衣冠の袖に彼の尊容を納め弘法大師を持して
開眼供養をなせしとなり是當寺本尊虚空藏十六尺の尊像なり
落星井　明星井ともいふ本堂の南にあり井のうへに社を建て明星天子を
道昌此井水を垢離して星ごとに一七日斷食一洗垢離
黎祭堂　都の工職人は所作をなして一七日斷食一洗垢離
本尊の智福を祈り近年斷食の者つづくまれなり

古今
見つくせば
柳桜を
こきまぜて
都ぞ春の
錦なりける
素性法師

髑髏おどろ〳〵仮粧て

花見の躰

鬼貫

大堰川より水上を小舟にて流れくだる水尾川清滝川の景色いと猿丸瀧
大瀬等の名ありてあらし山の紅葉一夜月掛松絶て未だ梅津桂の里
のむら〳〵紅流れくだる渡川の景
延喜の時こゝに大井川の行幸ありし日
今もかきこゝへ小舟こぎ寄ふもおもしろし 以上是則
大井河川上の松みどりこそかはらぬ行幸やなかりしもの
色〳〵の木葉ながるゝ大井川もみぢの紅葉こゝろあらん 貫之
忠岑
山河の流れにはあらで千代ふとも水の底のふかきこゝろは
秋のやまくれなゐの遠近き騒人扁舟こぎ掉さしめぐりおもしろき岸もくだり岩
間ふよせ来れくる水もたぎつ瀬ふ花紅葉こゝろ〳〵に織ちらして綾を重ねる
あり水上ふ踊る若鮎の鉤を争ふく奉動ふ紅葉み小石がちなる所へ網を
投て夜ふ入るまでも猶あり凉をさそふ河風ふ暑を忘れ小舟引興ふ乗じて
岸ふ歩ふ帰るも多し續文粋ふ天下の勝地大堰川ふ過ぎたるはなし
城中の名區ふ据ば野ふもくだるべうん右大臣師房卿も宣ひしふ

渡月橋ハ大井川ニアリテ法輪寺ヘ渡ル橋ナリ二名ヲ法幸橋法輪寺
橋トモイフ

風雅　大井河舟うかべたる橋の上ニ月ヲ見テ　前大納言為兼

小督殿ハ大井河ノ小二郎兵衛ガ家ノ東ノ方ノ中ニアリ小督局ハ桜町中納言
成範卿ノ女禁中一ノ美人ナリ琵琶ノ上手ナリ高倉院ノ御愛妃
ナリシガ平相国清盛公ノ怒ニアヒ山深ク隠ル弾正仲国ノ勅ヲ蒙リテ
嵯峨ノ法輪寺ニ尋ネ来リ給ヒシニ月ノ朧ナル夜ナリシカバ
山里ニ詠メンコソ哀ナレ秋ノ夜ノ月ヲ見ントテ多クノ人ノ
来リシニ亀山ノアタリヨリ松ノ一村アルニ琴ノ音聞ヘケレバ仲国
ソレト嬉シク門ヲ入テ御ヲ見ルニ仲国ヲ見テ御涙ヲ流シ
帰リ参リシ主上ヨリ召ヒシカバ御衣ヲ引カツギ玉ヒシ平家物語
千鳥渕ハ小督殿ノ西ノ町ニアリ巌アリトイフ　平家物語名所
渕ノ南ノ岸ノ辺
横笛ハ滝口入道ニ離レテ山ノ奥ニ住ミシ所ナリ今ハ滝口寺ト
号ス

西行桜　法輪寺の南にあり西行法師此所にて桜を詠ぜしと云ふ
西行庵　西行庵しのぶ草庵地は亀山にあり宗祇も此所にて源氏を講ぜしと云ふ
霊亀山臨川寺　嘉慶元年八月落の事あり禅家十刹の第二なり
三會院　本尊弥勒佛にて坐像之佛殿の額　三會院　足利義満公筆
亀山　後醍醐天皇
亀山法皇の仙居にて建武二年十月後醍醐天皇
より臨川寺夢窓國師に賜ふ　當寺の意を夢窓の作る
鹿王院　臨川寺の東にあり禅宗にて十刹之佛殿に本尊釋迦佛
脇士に十六羅漢を安置し運慶の作と云ふ　開基普明國師の像尊氏公作像
右の壇上に安置せし當寺の本願の将軍義満公にて至徳元年の建
立なり　十寶の佛舎利あり　傳に曰鎌倉将軍実朝公の霊夢により宋國へ仏舎利を傳来し相州の大慈寺に安置せし
後光厳院帝の御宇夢窓國師に勅して禁裏に移り其後夢窓は普明國師に譲り
今當寺にあり　毎年十月十七日舎利會を修す
車折社　下嵯峨祇村木町にあり　五道冥官降臨の地なり故に一名を清水直人
頼業の霊廟なりと云ふ　山所と車にてゆく
このあり　急牛にて車折れしと云ふ　遠近の商家賈人の願の成就せし
ものの奉納の灯籠の石にて山所にあり
五道冥官　閻魔王宮の廳にて若死紙に金札にて遠変の死者
の名を記す

有栖川 材木町より小川町の方へ流る 齊宮 有栖川の辺りに人家の北側にあり

千載 千早振いろその衣れ有栖川松とそ小そのけさすもみち 京極太政大臣

帷子辻 材木町の東にあり上古俗下古俗ともに秦常盤廣澤愛宕等の別れたる所 帷子辻といふ名を桓林皇后の骸骨さが野に捨しとき帷子の着給ひしに

安堵橋 帷子辻の西にあり 清涼寺のかたはら火災にかゝる人赤旃檀の香ひ殿山より是より名はけ甲塚 安堵橋のたもとにあり 弘法大師小袖を奪ひ驚て追ひ小奔る山所にて尊容に過ぎたるを彼はて安堵して初しとそ

常盤杜 辻のほとりにあり杜の下に石佛の乙み地藏 杜の西にあり六地藏巡りの其一なり 阿弥陀佛と安置 毎年七月廿四日地藏會あり

常盤墓 地藏堂の傍深光院の庭にあり牛若丸の母常盤小前仏里の人なり此ゆへ里人仏所より墳墓築く

拾遺 ㋐葉せぬ心それのみ侘ぬれ物そ杜とあらん 秋宣

新古 哀杜をまつ人もなき墓の内に住人さへや面かはりせぬ 玉葉之方

玉葉 深くわけこれの杜の捨よりも身をそ杜の名にはたてる 忠定

新後 秋風のきのふもこえぬ杜の雨深めそもぬれぬ日もなし 定家

古御所 常盤の東にあり八条女院仏所にて御所室の岩盤殿造営移し旧名あり 杜の西にあり 材本 紀伊国

右秦廣隆寺

方丈
拝殿
三社
太子堂
文化会館
如意堂
祖師堂

九月十二日
右秦牛象

聖徳太子
こゝろざし
執行し
たまふ
衆文の
弘法大師よ

太秦の里の名ハ應神天皇の御宇秦人日本ふみ多り蚕桑やしうし機織をうく
み帛綿をおくりそ人くの庸調ありぬ故ハ庸調秦し訓しうく也と獨逸天皇
ふうく賞へくまひしは此秦氏則秦始皇の廟祝連々々うりをろ
祝くうへを秦と訓るうり

當寺のそもあるを推古天皇十二年八月ふ大和ふ斑鳩宮て
聖徳太子近江秦川勝祝召て宣へやう我ハ夜夢ふ
一村あり楓林繁茂し清香常に薫ふ林中ふ大ふ
諸經の要文を誦しあるハ天童妙音祝供ふ
なりしか法祝演ふ今それ彼地ふ往ん川勝ハ則駕祝あふして前駈ふ
葛野の大堰ふ臨へてそれうを人ふ尋ねめし楓林の中ふ大圍の桂樹あり
異香薫ふ其樹の空虚ふ寸の瑞れ寶函あり光明赫々ふく蜂多く集り
賀祝發ふ隨ふ舞ふ祝拂ども盡ず凡人ハ蜂うんぬともをみ賢聖とみそ
るしめん則假宮祝蜂岡のそふ造て川勝ふ勅ふ百濟うもる佛像
祝安置ふしそれ祝蜂岡寺ふしん

後ふ廣隆寺ふ改む廣隆ハ川勝のふん祝上傳記の大意

本堂の藥師如來ハ向日明神の本祉之傳ふ曰山別王訓郡向日明神乃

社前に橋本あり 養同の年秋冬の交一日異人来りこれを伐て
佛像を造り南無醫王尊藥師佛と称し勿論加入うんぬん衆人是を傳
聽く集れども霊驗あらず耳目を驚かす 日本後記延暦十二年十二月
辻に小智威法師という人唐より来り居住す社司等その僧ふかくたのみ都鄙 乙訓社の佛像をこの年立
袖をつらぬく群衆感應はなはだ新なり智威没して後丹後国石作寺
うんぬん真後漸和天皇勅して當寺の本尊となる
左の堂に聖徳王御自作の 弥像を安置 代々の天子より黄櫨染の御袍
御下賜 袈裟御衣 石帯等を毎歳奉進 今に至るまで千二百年の例 供養 什寶
地蔵堂 金堂の西にあり地蔵菩薩 鎮守社 三十八所の 伽井
道昌大僧正の作 伊佐羅井 永天社
池のうちに青き蓮 石燈籠 左の堂の前にあり 古船を蓄えて模形とするなり
土用塚 太子堂の西道の中央にあり 大酒明神 天照左神八幡宮天満天神社
太子鎮玉を收め一所にあり
霊社多し 秦川勝の 桂宮院 左の堂の西一町にあり八角堂 推古
所あり堂内に二尊 釋の本尊を安置 二體 如意輪観音 則左の御作と阿弥陀佛へ
隋煬帝より推古天皇へ送りし本尊と聖徳太子の像 自作にして並像なり

祖師堂　途堂の西南ふあり中央弘法大師小の理源大師南い道昌大伝正の像
安置たてまつる小の間ふ如意輪観音安置たてまつる毎年九月十二日後の祭ふ
牛祭の神事あり當日の僧侶及人々大尊の形ふ表し異形の面をうけ風流の行粧
落し法刀弘佩をとり弊弘持ち牛ふ乗四人を前後弘圍従ふ行列練々くりて本堂の
ろうを後へ巡りて西のうろより祖師堂のおろ階ろふまりて奇祭として法人取弘
祭文をよみて法古代の法を存く遊ぶこと

祭文

支以姓弘乾坤の気ふうけ徳を陰陽の風ふ保信と尊ふて佛ふつく眞をいうして神弘
天尊地畢の禮をもろ是非得失の品弘奏ふる是偏ふ汗明の慶恩ふ国益草徳の幣帛弘
さしけるして摩吒羅神ふ奉上た豈神の恩弘報ゆるなんや足ふふんで四番のよ流
等一仏銀切弘拙て十抄の儀式をなるひろくの遊興弘催ふ弘ひ神明の法ふふ
倫人諸衆の慮歎弘るを弘ろく暗ふ神の納受をまつくんとし然間ふいろ頭へ小太鼓を載弘
くるひ足ふ番鼻高弘ひげはげひ中ふ數を垂大面弘をくむひてのうしもものかを
馬ふ跨弘けそ神くもありそくもあり偏ふ日鬼夜行ふ異ろ疫如鬼等の振舞をんろく摩
吒羅神を殺ふしをろろくふ天下安穏き家安泰のろろり因之永く遠く排ひ
退くなさそのく先ず三面の僧坊の中ふ志のひ入て物のろろり強盗人ふ詩怪弘いろいや
小童ろを本々のろりのろくんそあり後ろ骨ろた法師頭ものやろくそえ
ゆる扱いあこ服が痛そいうこ疔瘡ようろう面風ろふ尻瘡出ろ濃瘡あろ森そ
ふ向ふおおくろふひろいうひ右鼻ろりねろりふ指鼻ろりねろり傷屍ろろそ
ろた鐘楼法華堂のろろほこ言仲人いろくひ合の中ろ言貧苦男の入たり
無紙女の隣おりなひ堂塔の檜は啼いめくく大鳥小鳥ち聖教やふろ大嵐小嵐ち田
の畦うりろろくふの如ふろふのくく永くまく根の国そこの幽そくひまり
そくへんそのろり敬白謹上再拝

地蔵堂　左奉ふりの沼ふあり　古祠社　左奉の南ふあり向日明神此地ハ新向ノ
弘法大師の地ろり　槻木の霊をろる

木鴻社

新勅撰

なにはなる
よのそらめの
白雪の
雪にまがへる
波かな

後拾遺

梅宮

新緑拾遺

ちゝこ今
花咲梅の
宮さくら
たそそも
万代の
さかりそも
つゝめ
慶春

まつのを
松尾社
清滝権現
作うを
松の尾
山の
あつひ
草
のつくふ
近く
契り
あらん
順徳院

別當坊
三ノ小祠
四大社
本社
本宮
大日堂
新宮
三ノ宮
十禪寺
舍利殿

末社に右秦の翁の森の中にあり天照御魂神以下の諸々折摂社已
貴命に左右に坐を鹽根社に本社の西の方にあり糸引き流れ南へ入
社を祓を西の傍に清泉あり世の人名づけ鹽井と詳しく次中に三つ組合の
當所社司 石鳥居 八角の柱あり 例祭に九月廿(日)鹽根社事に二月十一日
の祝 鹽の入口にあり 鹽根のそれに六月廿日
みそとの舟らのつめ木の落ふいそらあまのつりそん
文保二年四月従七位伊時遊仙窟を借抄せんとて源氏歌して此社に詣
結び老翁あり常に仁公論伊時らん至りて相傳し一性公後畢れ恩のこと
實にな迷ふかりて彦う
是當社の應現るりそ
石秦の南竹林の中にあり今は草菴みて岡山源山禅門の後を安置本像な
海土三寸
一にて二人そう倘ふ老ー撫ふ公おぢ例何ものぬのへとてふ
破れ車ふ乗して四郷城往来た世の人呼て車僧らへ
又七百歳の年歴のふ故ふる公七百歳ともそん
梅宮の四条の西梅津里ふあるふ所四座みて酒解神 大若子 小若子
酒解子神あり相殿ふ橘贈左近大臣清友 檀林皇后嘉智子をおふ
山皇后ハ淳和天皇の愛妃なりしかとも子なきふ公常ふ愁て酒解神公祈りふ
て妊身ふうふしく則當社の清砂を作坐の下ふ敷ふ公後ー一人仁明天皇を安り故ふ
世人凡ふ腫ふ當社の砂を取て帯縁ふ 熊野之所 新向石 紀州三熊野ふう三の鳥居そして他ふる
當社の例祭ふ四月上ノ申日社壇二基

梅津川　大井川の流なり此所に舟渡しあり　四条渡ともいふ　桜本坊南に民家迄

長福寺　東梅津にあり　浄家　國師大室輪ともいふ　其園院の所なり

咲句ハ梅津の川のはなさそふ山おろしのかけもくり波　為家

春日社住吉社　西院村にあり　此所の氏神なり　西院の西道の南にあり　俗にはるしも　八月廿八日祭礼二基ありて春日住吉ニ野宮　歌宮の白玉姫　紫野の北なり

松尾社ハ梅津の西にあり　別當ふかい社のうしろの山なり　當社の

一条院の御ときよりそ松尾行幸ありくふかきみちとかや　明神の御託宣の始り松尾ふもとの

ちりそふる松の尾山ハ名のみにて花ももみちもなしとそきく

本社を祭る所二座みて大山咋神市杵嶋姫命　大宝元年ニ秦都理といふ人社領建て分土ともに迁す　鎮座記ハ文明帝和銅二年四月十一日始て

花の丹塗の矢化して松尾の神と現ずと則秦良勝　松尾七社　月讀社　櫟谷社　二の宮　三の宮　四大社

同ニ正光松尾の守護ともに今の社司の遠祖なり　當年社の縁ふかき例祭ハ四月上酉日仁明帝承和四年ニ始る　社頭七基西七座の内　末社

祭礼ハ八月朔日ハ鳥井の傍にて相撲あり　東方西方ともに東西に出て

四月八日松尾ふもとの花ふそ　上卿の参詣ハ近年ハ絶たり

時雨ともの音ともきく秋ハ今ハのりせてこそ　後京極良経

舎利殿　本社の南にありいつれの所にも大体の社あり谷壹の延朗上人の日早くうれしと

伐採　松の木の中に寿福あらん社家参詣ありて舎利と盛法人寿異のそなへありて

ともに銅にうつして舎利と盛法人寿異のそなへありて

延朗の言依信ト三層の塔を建てありと云云

其物の臭のさんざる
其角

明智坊石像　松尾社の小一町ばかり南にあり明智坊いと大なる門の礎ばかり大小二流と
津澤よりおこして此所に建ん

月讀社　松尾の南二町ばかりにあり松尾七社の内なり　當社鎮座のこと詳ならず松尾より
經前とあるより齊衡三年三月ふと城田葛野郡月讀社を松尾の南に建んとし文徳
實録に出るより又文徳帝時宇佐の寶三年ふと瘡瘡大ふに流行して諸人死ぬ仍て此社
當社の神託ありてその害をまぬかれ里人よりこぞって貢納疱瘡のまぬがれ免んとする此社なり
神のたまえり依て由二代實録にあり

狐齊ひ　松室の西住還の傍にあり　小社なり幸の神なり
實ハ結地尊なり

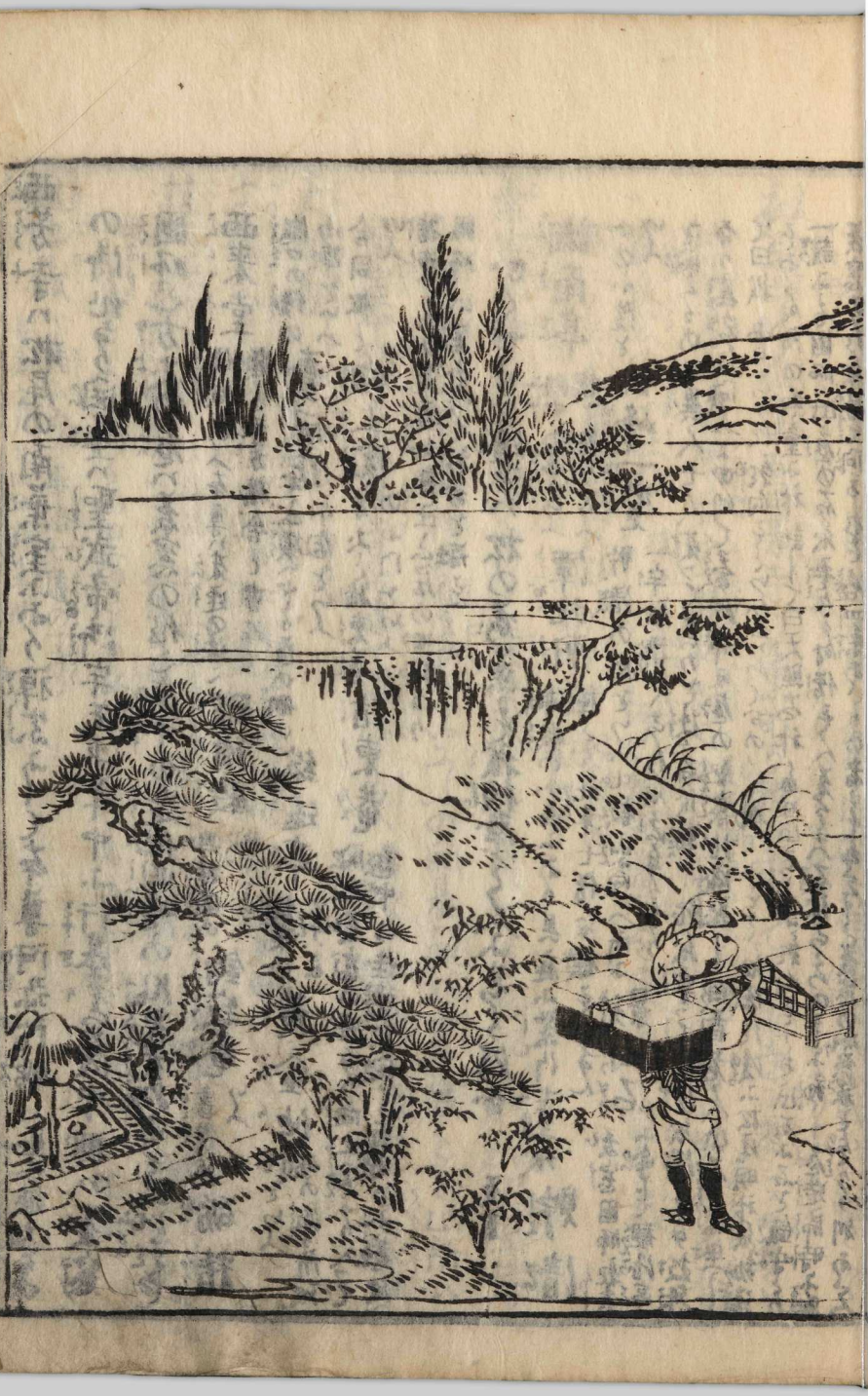
善巌寺　月讀の南谷村竹林の中にあり寺旨い華巌みしく本尊を大
日如来ふ釋迦佛頭ふ宝冠を戴く長一丈石ふ圓基風潭像　左のごとく華嚴經を
計是華嚴の相なり
門の額華巌寺ハ英彔陽えのまた左の脇ふ風潭の手ふ山所へ最福寺
の延朗上人の行ゆしゝ谷堂の旧跡ふ　寺々家の近年風潭和尚華巌宇ふ改
再興おこんとて松尾安照寺ふ遷して善巌寺とあらため此所ふあそばす
衣手杜　松尾の東にあり澤水に臨流し樹木繁茂して神木ふ
後ハ杜ハ松尾の社司ふ

秋毎ふたゝの深くそまりぬ乃衣手の杜　孔舗

深しふえる叩ふまれく社風をしたふ衣手の杜　為氏

月讀社
兼室西芳寺
桂の里
久遠寺
月讀社
久遠寺

久達寺



西芳寺の松尾の南無室ふあり禅宗にして本尊阿弥陀佛ハ聖徳太子
の作なり開基ハ聖武帝御宇天平年中ふ行基菩薩中興ハ夢窓
國師と方丈の庭ハ夢窓の作と庭中の造化四時の風光玄妙にして
西来堂 佛殿にして本尊ハ達磨の像 瑠璃殿 無縫塔の 釣寂菴 書院及 砌精
瀧口の像の 賣風店 小店をいふ 縮遠亭 縮遠の 黄金池 池をいふ
小亭をいふ 合同舩 舩の溜所 向上関 方丈より指東菴 指東菴 開山夢窓の塔あり向上関へ入て
指東といふ是真如親王山居の旧地なり 庭中の佳境なり 南禅の小菴なり
國師此室ふ入ってねむりを貪ぼる

かくせつ道さへ松の為葉こそ我信者ともふもろ人ふ 夢窓

湘南亭 池中の亭をいふ 潭北軒 佛殿の 貯清 北斗七星を 影向石 夢窓國師勧請
橋を渡りて 西ふあり 模せり 仏法守護をつかさどる 神ありと
小の小院を 士峰一覧 貯清の南をいふ 山向ふ所ふ 夢窓國師勧請
一宇仮構くられ仏名をかうり
を開くるの日異人七人来って其力を借りて 仏堂を 自中仏像をうつし奉る
うり其名を「吹上」のりて 今仏殿の 勧請 池畔 一邨老人 此石上ふ坐して
て曰我毎日ここに来て 向ふ 此石を 鎮守 そある 財所の 仏堂ふ 神詫して曰天照皇神毎日山ごとふ来向ふ
一説ふ 国師此庭の石仏を 財侶 そ人 夢ふ天石仏ありのふ神勧請
夢窓ふれ仏隆て向ふ 給四条 この者ともふ 夢窓の 仏ふ 勧請時ふ

らんことを願ひそれより後杜一村殊に盛なり今四条住心院深厳地蔵の戸帳をあけば件のけさをうけつぐ場杜なりけり今その場杜を天給まふあるべきなん

衣笠山地蔵院 西芳寺の南にあり禅宗にて天龍寺に属す本尊地蔵尊にて開山の宗鏡禅師は夏窓国師の法嗣にて奮山地蔵院衣笠庵家良公の山荘あり後に改て衣笠殿と号す細川頼之當寺を建立して諸堂皆そろふ應仁の兵火に罹て亡廃しが今延慶房の遺れり不動の井衣笠山の麓にあり

巣室山 浄住寺にて禅宗にて黄檗派に本尊は如意輪観音坐像七寸天竺仏ふるくて鉄牛和尚感得の尊像ありといへり開基は興聖菩薩といふ所は巣室中納言定能寺を建て閑居しが年ふりて寺廃をへ緑二年鉄牛和尚再興して禅刹となりしと

天敵森 下山田のあたりにて小社あり由来未考

文徳天皇陵 下山田の南にあり

御霊社 中桂村にあり橘逸勢を祭るとぞ

桂川 大井の流れにて舟渡しあり舟渡より桂里川の西にあり往代の名所にて上野花の十町ばかりにあり梅津の南より桂里まで桂橋あり故に歌にも桂の名あり

古今 久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花の散らむ 定家

廻地蔵 下桂にあり華洛七道の一なり

毎年七月九四日群集す

久遠寺の挂の西に湧ふあり　山所を寺内　亜源左衛門尉　悪所あて西山和坊と称ス

阿弥陀堂　本尊ハ安阿弥の開基ニ覚如上人ゟり　當宗の開山親鸞聖人ゟり　第三代ゟて　道徳秉燭

の上人ゟり観應二年正月十九日　覚如上人塔堂湧ふ　ケ千くの面　當まふ

八十二歳ゟて入寂を　あり

本仏の面ゟり　半の半里人ゟれ祈ゟり雨を祈ゟ　忽其験あり　一年西玄寺本ま

の宝蔵ふ救ふ寺内震動ゟて止ゟ　山所ふ移ゟ　今ふあり　當村ふ災あゟ　ケ千く

しるそその山瑞ゟ

ゟゟ故ふ名ゟ

大杜坂ハ樫原の西一里ふあり　時の西を町くゟりふ城丹波国堺の立石あり

山所武家多し　時の里くゟ丹波ふの旅人を

ゟび愛ゟ人　酒呑童子首塚　山所ふあり大江ふの鬼神ゟ平げて

市場ゟり　首ゟ山所ふけり

峠地蔵　大福寺と號を大杜坂作ふあり　市盛長者と　人の娘あり　難

ふのゟりて空くゟの恵ゟ僧都　山所ふ籠り　持念祈ゟの時ゟの女房ゟ

夏土のゟりくゟ救ひの人と頼ゟ僧都いろくの法門を説ゟ人ゟ女ゟりゟる苦患

とまぬれゟり我誓ゟりゟ　産婦の難死を救ゟ　地蔵菩ゟ

安産ゟあくゟ終ゟて法ゟ　ゆくふの女の塚ゟ　しるゟ相撲を

地蔵尊ゟ　作ゟ一宇の堂を建て安置ゟり　今の本尊ゟれゟり

唐櫃越　兼室の陣ゟ地蔵院の前ゟり丹波の王子村ふ出ゟ間道

ゟり　ふ大木の松杉ゟあり　後陽五条の西ふ至ゟる

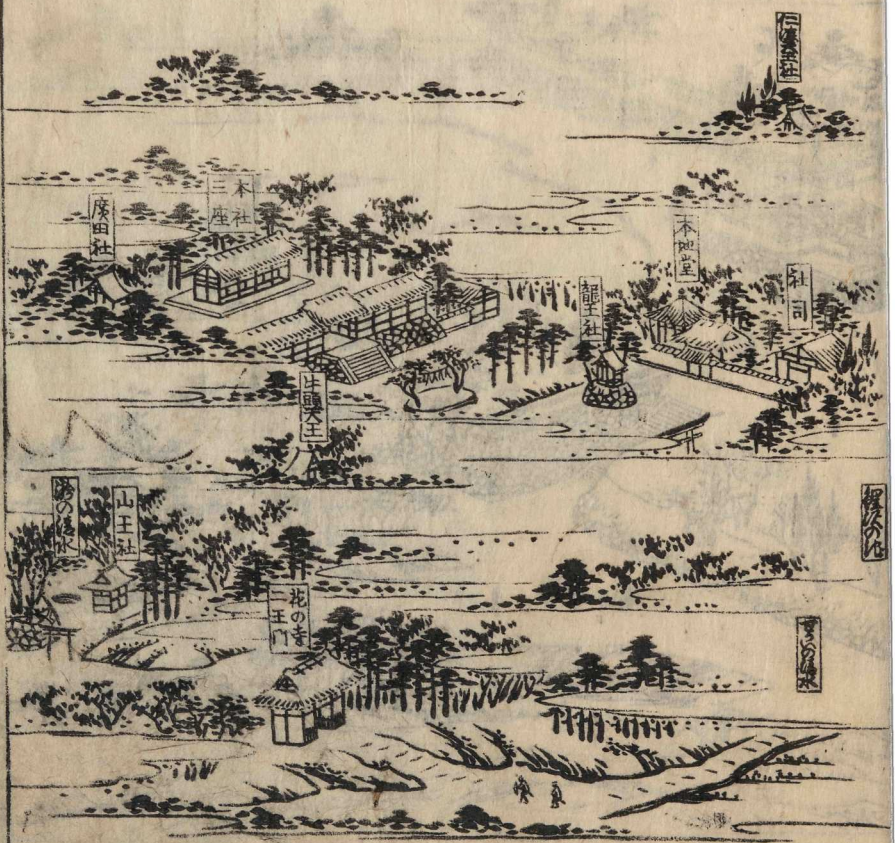
大原野　樫原ゟり坤二十町ゟりふあり　民村多し

いちくへゟり山野里ゟ　ふ至ゟる

郡名ゟ　南大条ふの　樫原ゟりふあゟ　そそ

藤原貴方

大原野春日



花の寺

役行者
岩窟
本堂
方丈
翁の池
白山社
西行旧跡
石不動
西行掛
経堂
西行庵

春日社の大原野林中にあり

古今 二條のきさきの御ぐし東宮れうをうせ給へりける時

おほけなくふりにしよりぞそめてける小塩の山の松の下露

拾遺 大原野社もとは二條の后の氏人のおろかならず

後拾 祈りてもなほ山のかひありきとあれ社のしるしなるらん

一條摂政

左大臣

當社の神は武甕槌命 齊主命 天津兒屋命 姫大神の四座なりて

往昔仁明帝 嘉祥三年に左大臣冬嗣公の祈請し給ひ南都二社

より勧請し平安城守護神と定めおかれしより藤氏の后宮

遠々れば大原野ふたり后妃まします御幸は二月上の申日

え年より始る南都春日の社事に准して執行ふとぞ

大原野のこゝをそこと世ふのころ今くるらく

本作より大原の大路西さまふのり川のことやそうく

あらん車もまるべくて附ふねりはつくと古来院より

詠ぜしこゝろぞ奉らぬのみぞうん 下畧

鯉澤池 社の南にあり 中略 社の 瀬和井清水 此の儘み

夜泣きをこせての井ぬみい神くる春大いまのおとをすれ

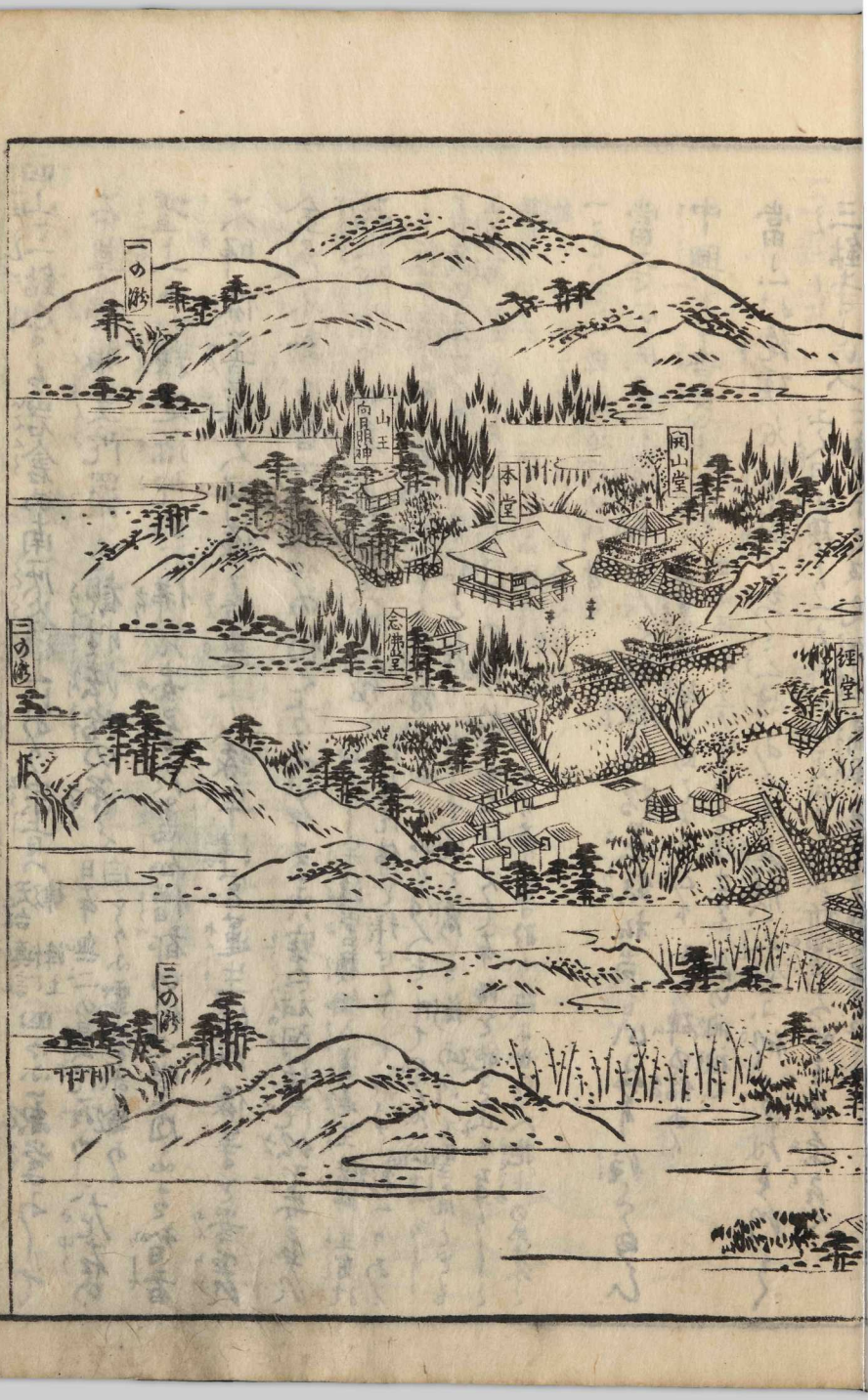
大江匡房

小笹山勝持寺ハ云日社西ノ方ニアリ宗旨ハ天台ニシテ本尊ハ薬
師如来 傳教大師の作 本堂の額ハ小野道風の筆當寺ニ
ての開基ハ役行者
ミて自作の不動明王を本尊ニ大原寺ニ號を不動尊今ハ伽藍僧坊
堂塔ハ安置ス
四十九院魏ニやしなひて嚴重ニ手入ニて破壊ニ及ひしを佛陀上人再
興ス 文徳天皇佛陀上人を御帰依
ありて伽藍をいとなミのひしに
法師像西行桜 堂前の左右 西行菴室 ニ三町ニ
ありて當ニの境内ニ植ル
終日花の散ニそめる西行の
霊ニ供ス
冴野沼 石碑の下ニ
ありて 辨財天社 池のほとり
ありて 役行者窟 西の方ニ
ありて
いふけさにえ散ニ沼や水ぐくん小笹のみ雪ハうすけて 光信
毘沙門天 本堂小安座ニ
傳教大師の作ニて北方ニ
ありて 役行者像 安座ス 白山社 當ニの
鎮守ニ
二王門 金剛力士を安座ス 阿の像ハ
吽慶の作 吽の像ハ湛慶の作 玄賓石 林の中ニ
ありて 玄賓の住ひし
ニ
慈鎮和尚もこゝ地ニ住れのひ出のまゝ残りてよめる
笹深く宿れあるじもそれとしらぬ世ニ作る名ハ残れ
慈鎮

え和年中若狭守勝俊世栄公さけそはふ幽居せしとふ故に天哉翁長
晴子と自称してまた東山ふもと居うつりし人おもふ名るく
長晴翁弥生橋驢上岩細り玄旨幽斎も長岡ふ閑居せしは連歌の宗
指月に等はれとあり細川忠興卿丹後国三十三万石の領主
迎取事あり此まふおのそえ亀二年二月又日うり連句を興行せし
しるうまれ紙大原千句とそ世ふ名高し 連句の懐紙を
當るの什物
長岡の都ハ桓武天皇延暦三年ふるくの京うつりされ風水の地上羽村
の長ふあり字を御所屋敷と入樫本京の南うり二里の小そ南小畑岡
ふうれど長岡く號うれ此地ふ都のあとハ十二年の間うて今ハ平畑
ふうれされ
古今
西の京とハ
うつりゆくれ朝たのくれみこるをふすらゆるふりうら
えはくハくくぬくまこそうつりそうくらうれんそうり
そうりみてくのみこのりこうこみのうこそうくふ
ほうこそうこうあけそうれぞうくうて有うこと
おひぬれてだにうぬ別もありとをいよくうまそうれ
世中ふけうぬ別のうくもうちよりをうぐうのまれこそ
ありつくの朝臣

稲荷社を此方の南林の中にあり多き所は大歳神みて向日の社地主
神也祈毎年例祭は九月廿一日拜殿において能あり
此所の産湯
西岩倉金蔵寺は此方の南長峯坂本の西にあり 稲荷社の
平安城遷都の時王城の四方へ鉾王を收らる此所も其一所天台宗み
みて岩倉と号を石蔵山ともふあり
て本尊は十一面観世音なり 向日明神の 作
安置し念佛堂あり阿弥陀佛を安置し
一の滝二の滝三の滝とも 向日明神化現し
所なり
開基の隆豊得師は人皇の薩別の者の人又は薩摩大守重命なり十三歳
て出家し興寺の通昭上人に従ひて禅法を風龍門にまれ
義渕に就て学ひ會て晩年に及び國の智識と聞えそこに論の微旨を
あつまり靈夢をうけて當山に来りて篇を草庵をむすび
給ふ隆豊なりけるや翁をいつくの人ぞと問ふ翁答ていはく
ようけんとそいひて滝を指すと見えしが翁は忽ち
を放りうせぬ其矢の立たる所に一株の松生ひ出ぬ
翁とは稲荷大神にて靈木なりけり千手の像を彫刻し給ふ隆豊その
言ふ所にて尊像を彫刻し終の本尊とせんと翁に曰く此地仮寺を
授くべし佛閣伽藍は造立せば像を安置し給へと守護神となり向日に
止まれとなり

西岩倉
金藏寺
三宝院
灰谷村


一の鳥居
山王
向日吉神
本堂
岡山堂
三の鳥居
経堂
三の鳥居

西山三鈷寺と名く岩倉の南に谷れ上にあり宗旨は天台真言律浄土四宗兼学ありて
本尊佛眼曼陀羅を観世法橋の筆と日本無二の曼陀羅なりて尤有
信ある靈應あり験あり
壇上に釋迦弥陀の二佛弘安年中恵心僧都の作と堂内に智者
大師像善導大師像善恵上人像宇津宮蓮生法師像等を安置
金色不動を智證大師の作と方言にいふ守護不動と安置
抱止阿弥陀如来は慈覺大師の作なり宇津宮頼綱入道蓮生法師生前
こゝに本尊に向ひて念佛を修行し給ひしとぞ阿弥陀佛と拝せんとて
菩薩の来迎を拝し給ひしとぞ
弥陀帰らんとしてひしとその袖をかきつかみて堅給ひしを
抱止めてありしかば則ち念佛を本尊殊り故に世の人抱止の地来と
称すと真永元年八月十五夜と記
一名は西三條道遥院の作なり
當寺の開基は源舜上人と観世法橋慈鎮和尚なり此ふたり住と
中興は善恵上人と 善恵廟塔二町ばかりにあり碑の銘あり
世に西山上人とて浄土宗一派の開祖と
當山は絶頂なる髻嶽とつゞく二峯ありて真形の三鈷に似ばかくは
三鈷寺と云 土人曰此嶺より二大佛七堂伽藍所謂二大仏を京東
七條の京大仏 建部山 高雄 高瀬 愛山等を

三鈷寺

西山
吾峯寺
開山堂
護摩堂

本堂
三門

小塩山十輪寺（おしおさんじゅうりんじ）

中臣師宗

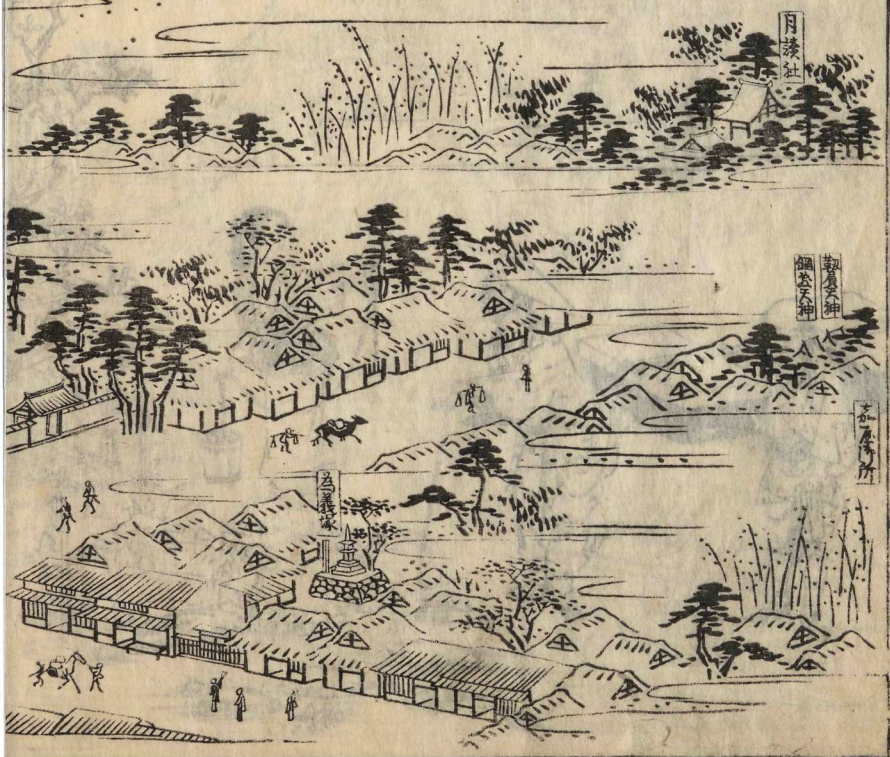
秋の
名所を
小塩山
森をこそひや
四あうん
らん

続後拾遺

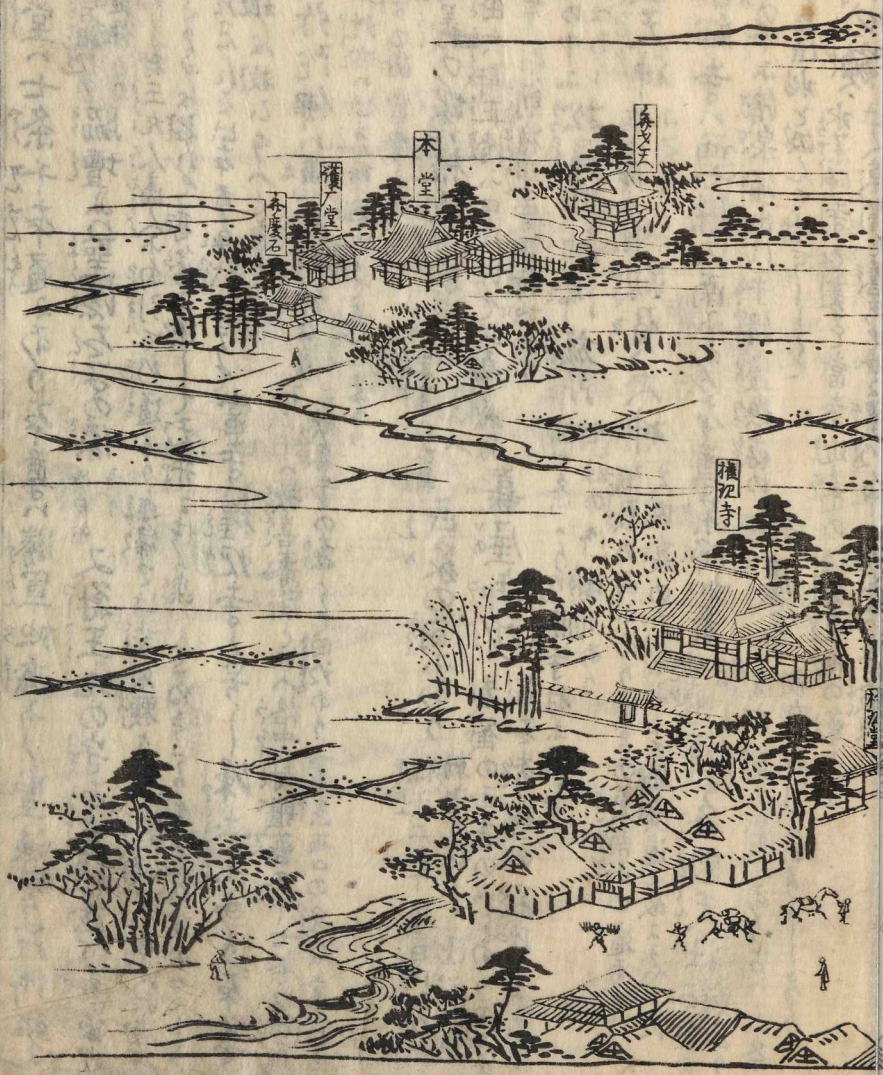
西山善峰寺小塔のうへにあり天台宗にして本尊千手観音なり
此本尊は泰澄の神木にて行基法師の作なり行円法師夢瑞と云ふ弘仁法師を招て千手の像を彫らしむ是洛陽革堂の本尊なりその餘材をもて六人の像を彫り當寺本尊是なり
阿弥陀堂の本尊は慈覚大師の作二重塔は大日如来なり
開基は源算上人播州の人にして孤児なり道のほとりに捨られしを故所の人拾ひて養育し比叡山にて剃髪受戒し四十余年登壇重受して功を積徳僧都の貴子なり母の愛を蒙りしかども石上に坐して七昼夜坐禅を怠給はずして老翁に化現しこの社の知行神人早く佛場坂建立ありて大に可観ゆゑ都近傍より参詣して殷賑を極めり
天聽に達し後一條院御宇長久二年の秋仏盗成就しかども
白山水當山寶光坊にあり源算上人如法経書写れしと仙翁石源算上人
白山権現出現し五彩の雲にうかびたちまち
記念にとて阿智坂社當山へ移る七面の中にあり観性法橋慈鎮和尚
坐禅石とて
尊圓法親王等の墳當山の小上にあり
小塔は千輪寺と号して蓮小塔里にあり天台宗にして善峰に属す
本尊は観世音之御作故小塔云観音堂
脇堂北藏 深草皇后安養安の像也
玉原業平塔 當山西の上にあり
修竜古池 本堂のうしろ上にあり業平姫屋の系
と潮汲池 當寺より一町半東にあり潮を汲ませ山所を焼
う

朱雀権現堂

烏義塚



水薬師



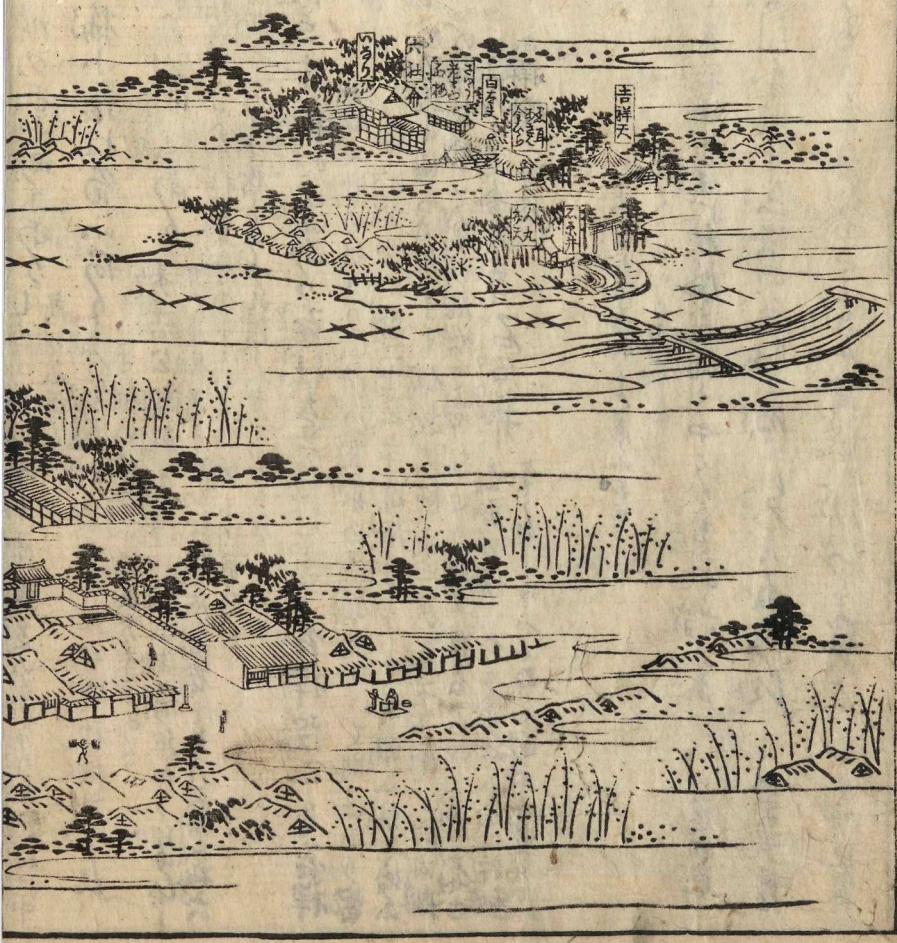
権現堂ハ七条千本通ニあり本尊ハ勝軍地蔵ニて聖徳太子御作
愛宕権現の本地佛なり脇壇ニハ聖徳太子の像 自作 又猪王丸の守本尊地蔵を安置
むかし猪王丸人商人ニ勾引て行道より逃帰りしまゝ頼朝公へ仕僧人商人共ニ
来りて命を取んとせしを猪王丸是本尊身代となりて当寺ハ権現寺と号し浄土宗ニあり本尊
ハ地蔵なり
阿弥陀佛ハ恵心の作なり 歓喜寿院ハ洛中卦疆数の中七条通の南
ニ歓喜寺の森と旧跡あり 此ニ西口の字ハ堂の口と
いふ古ハ此辺迄内ニして真言宗なり
旧寺の図当寺ニあり
源為義の嫡ハ権現堂の前町ニ 朱雀の大路 民家の間ニあり
鎌田兵衛正清ニ申付て父為義を 嘉屋御所 未雀の西道の小ニあり田畑
浴せ一所ニ則権現寺の持地なり 為を勢卿の宅地なりとそ
茲の中ニ松尾明神ニ御旅所 西七条 七社の 猿所あり
小社あり 勝軍地蔵ニ
綱敷天神 西七条小側 菅原天神 綱敷の西ニあり此宮の東南小の道あり
ニあり 大内裏の右京ニて菅原通之故ニ名ハ
水薬師寺ハ西七条の南ニある本尊薬師如来 延喜二年 保元二年 後白川院 勅をうけて源義朝
社の下ニ清泉涌出て平清盛熱病の 辨慶石 後ニ堂のそばニあり古ハ二条
ありたる水を汲んで参せしとそ 辨慶石町とあり
門の額 水薬師寺と書を当寺近年の住職泉南の筆なり
さん草書を書そこなひ墨汚なり 明和六年寅ニ

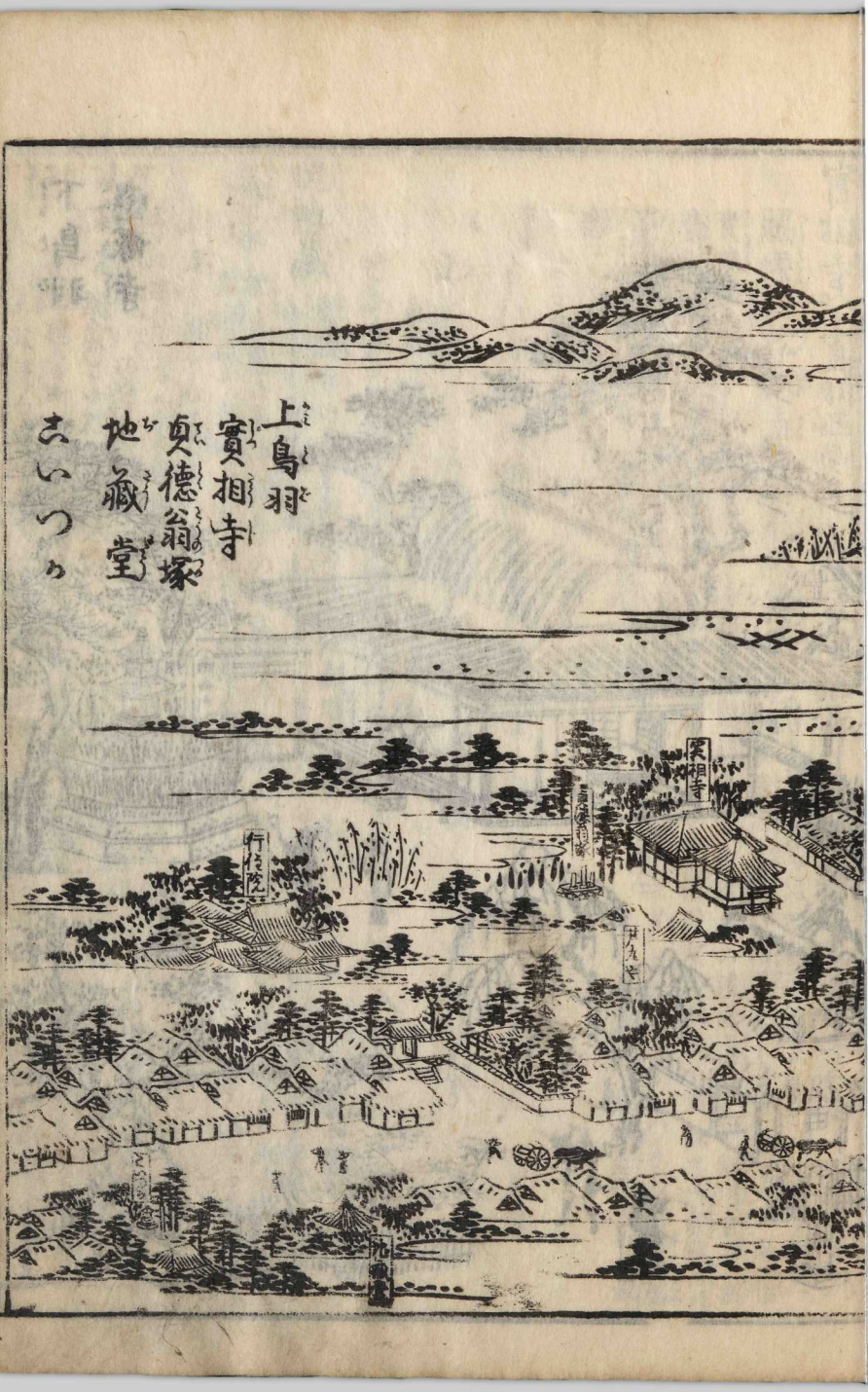
西寺古跡

まつのを
松尾
祭礼

川勝寺 西七條の西七町ふあり むかし泰川勝仏益躍玄の所ありし所々ふあり 今松屋敷の跡ふのこれり神輿神供所ふた
西寺れ旧記を按小路より南ふなり 今松屋敷の跡ふのこれり神輿神供所ふた
唐橋 四ツ塚より西六町ふあり 秀吉公朝鮮出陣れ時此街道を往来の人唐街道とよひ此橋を唐橋と号ひ又唐橋とも拾分称ふ
むかしより唐橋通ありそれより東まの小路ふ此橋ふれば唐橋とよふ名所人考へあるべし
その下流よりの橋ふれば唐橋とよふ名所人考へあるべし
吉祥院天満宮 唐橋より南ふあり本社を菅神をまつる吉祥院ふを吉祥
天女を安置ふた 傳教大師の仏をりし仏所ふ菅家の所領地ふて別荘ありし歟
家より祖清公卿延暦二十二年遣唐使として異朝ふ渡り給ふ
船中ふて風波の難ふ逢ひ給ふ時傳教大師求法の為ふ入唐し則同船
して吉祥天女の像ふ念誦ふて風波ふ逢ひ給ふて帰朝せり故ふ傳教大師吉祥天女の
像を祈る潜公卿ふ此地ふ堂舎ふ建ていまる像を安置ふ吉祥院と号ふた
石原井 名所の傍ふあり菅神ふ水ふ供ふ給ふ
菅原神の銘をきざむ
鳥羽里 四ツ塚の南ふあり 上る羽下る羽と云南ふ七里
鳥羽里ふ四ツ塚の南ふあり 古くより民家多し
家ゐけり多き羽田の面れ秋風ふ乱れ靡く青れ稲葉 後鳥羽院
あやなまし人もをし ふ塚のあり羽ふ波こえ久月日のみ 前中納言定継
家ゐけり多き羽田の面れ秋風ふ乱れ靡く青れ稲葉
あやなまし人もをし ふ塚のあり羽ふ波こえ久月日のみ 菅相丞門院四条

吉祥院と天満宮




上鳥羽
實相寺
奥徳翁塚
地藏堂
さいつち
實相寺

下鳥羽
憩家寺

實相寺の上鳥羽西側にあり法華宗にして開基を大覺上人とす本堂の
脇壇に松永貞徳翁の像あり
松永弾正久秀
貴城城七のうち七ヶ所の城主の親族にて成長の後武道に抜群にて細川玄旨
齋と師弟長頼翁なくなりしかばまた貞徳翁に
蘆九屋本堂の巽にあり貞徳翁
風居士の墓所あり
應二年十一月十二日
卒八十二歳
家集
貞徳翁墓
戸九屋のうしろにあり塔は松
逍遊軒明心居士とあり刻
あたにちくさの秋のひとさとを露とくらす庵ぬしかな 貞徳
長頼翁西山にこもりゐけるころ
とふらくに月もうとくや世をすてゝ 仝
實相寺の南東側にあり六地蔵巡の一なり
地蔵堂の南に隣る
觀音堂 聖觀音を安ず
紀音堂の南淨禅寺の門前にあり羅山子の碑の銘に遷る預土の永井日向守
直清ぬり立塚二ヶ所ありつまびらかにせず
年経し鯉をも土人ぬり立塚とぞ
らに埋むとぞ故に鯉塚ともいふ
鴨川のながれふるき橋より上る羽の南にあり
久我畷 上る羽の南にあり久我の里をへて
小枝橋 民家を小枝町とぞ
秋 小枝橋より町を南へ行て茶店の向ふより鳥羽法皇城南離宮の跡
秋の山くれ人今絶の岡と遷るとり

衣かた羽田の里は稲莚いくよしきりぬ秋の山風　信光

夕日さす秋の山本夢さめて羽田の稲葉の　かぜぞ　等持院

忘塚寺小村より南八町ばかりあり堂の南に銘曰渡る花散門前源渡妻
墓裏表冲前秀玉善尼墓　天正元甲子年六月廿四日文学上人開基忘塚根元の
地也慶應二庚子年建立しかり
遠藤武者盛遠出家して文学上人渡の妻と忘墓して千束の石を荷ふ真言に
随ひ渡が姿と成盛遠を斬らんと貞女の操仏菩薩の守り所なり
法傳寺を忘塚の南にあり始め真言宗にて本尊あみ茶師佛なり安置
行基の作と内にあり　洛東智恩院住職圓智上人此寺に隠居して浄土宗に改む
本尊の阿弥陀佛は惠心の作と善導大師像　法然上人像　法然上人像
西山上人の作なり　方便水　内の小さきあり　墨人を多くあやまりあるとて
二祖対面の像といふ　念仏を唱へて井を堀しゆゑ此名あり
一念寺　法傳寺の南にあり本尊阿弥陀佛と云ふ
開基の真阿弥陀佛といふ
横大路を下る羽の南小綾　この道ばかりより秀吉公の代山所を
運送するの舟着ありしより繁昌の家多し無庫尾を過ぎ後を
そ新屋敷多し

鳥羽の車僧ハ
もと祇園精舎ニ
ゐしが
勅許ありしと
つひに伝へ
ず

久世里

藏王堂

琴彈松

招井清水

福田寺

羽束師の森を
久世より一里半
南へして久我
畷より東にあり
このうへの社へ
天津児屋命を
祭る

金葉
家の風
ふくあなゆ
このうへの
社の玄栄
ありそせぬる

藤原敦頼

上久世藏王堂ハ醫王山光福寺と號し宗旨ハ四宗兼學ありて本尊ハ
藏王權現（役行者の作又二王門の金剛力士ハ聖德太子作）
山寺の初ハ村上帝の御宇天曆年中ゐく
淨藏貴所當寺の（祠墓也）吉野の奥金峯嶽より唯小鉢ひとつ
洛ふ都へとゝ飛來りもあくで藏王權現忽然としてあらわれ
のし宮へ安ふ汝等に託ふだして我ハ今都小降ぐ事をも
供をゞ永く有緣衆生救ひんと貴所者黒衣をゞ着ふひきを
解て肩小結び省に則頁奉ふ法を多だゞに忽化して本像ふうつふ
桂川の西ゐくり松上りて持ゐる錫杖ふ泊水ふ落てゐこゐゐりて小の
のくふ多ふ一つの森のくふ小光明ありてくれゐ妖賊天の壇場ふさんと於く
藏王れ神像大石ゐめくみて動ふ果ぞ有緣れ地と悟ふ則卅ふふこゐり
持念をゐくふ夜西のかくふ大ふる椰ゐ生ふ又明天老翁あらわれ椰小のそ
辨財天醫王善逝と唱へて拜を貴所ふ仁祕宮ゐ翁ふて妖賊天降臨の
地ふり今時ふるゐ藏王權現ゐ地ハ專りゐゐ早く仏陰を蒙て安住せゐ利益廣大

なくんと云終て失ぬ貴所れくの為に堂を営ふ像を安置て當る祥の
例祭は四月十九日と二月祇園會には馬の頭に
後ろ社の祇王堂の南にある牛頭天王をおがむ
鷲尾寺の中久世の西大寺にある本尊は薬師如来にて秘仏なり尊像
いのしゝの岩窟ある仏壇あり中に国狛こまんて
小堂とうり今曹洞宗の僧住持
木下明神いまの西にあり兵賊夫を祭る此社氏神と祭る四月己白く
福田寺は下久世にあり本尊は地蔵なりて行基の作なり摩耶夫人の像
を彫まつりて世の人安産の為に梁武帝こゝに作りて人赤栴檀にて
彫像なり
摩耶山天上寺に安置たり後に此寺にうつす
法師入唐のはし海にて帰朝し
龍神像は後恵法師雨乞の法
早の年雨を祈れ
修をして霊験あり
板井清水
いまの民家にあり
宇多天皇六代の苗裔俊頼のまゝ
通り遊ぜりこれが世の栄ひ宿因浅く
俗の塵のろ
湖の底ふかもそこしい屋くぬしの人の雑をこゝる
ぬしものぞまぼ
ぬしものぞまぼ
福田寺の封境なり
後恵法師
智世ふ誉あり
ぬしものぞまぼ
ぬしものぞまぼ
ぬしものぞまぼ

向日明神ハ久世の坤のかた
[illegible]
[illegible]
[illegible]

向明神
むかうのみやうじん
護法院
山王社

白山
本社
御殿
神楽
多宝塔
多宝水

本堂
八幡

大慈山と訓す寺は西岡今里にあり當寺は推古天皇の御願みて聖徳
太子の開基なり其後弘仁二年の冬弘法大師別當職に補し
八幡宮は示現給ふ大師は像を彫刻しまつれり首は八幡宮に現
し神像よきざみまつり密法擁護のまもりとなるが故に神佛合體の
本地垂迹らん當寺の本尊是なり例載三月廿一日開帳をなす寛平法皇脫
履のそのゝ行宮とし給ふ是によりて法皇ともなづくといへり
方境廣大みて伽藍巖重なり中頃南禪寺の伯英和尚住職し
又武州護持院再興ありて真言宗となれり
岡伽井は訓寺の東にあり大師密法修行の時汲給ふ井なりとぞ
いふなるべし

今里

田もるれど遠の今里なれば雨面に烟なるびく

明皇妃は今里の西にまします推古天皇離宮あり所なり

是明法親王

粟生光明寺

本堂

報國山光明寺に栗生野にあり宗旨は淨土宗西山流義の一本寺にて本尊は圓光
大師を坐像にして自作なり　法然上人四國へ左遷の時阿毋儀の消息故ありて
阿弥陀堂の本尊は惠心僧都の作にて江州堅田淨土堂千體佛の中
尊なり　龍谷蓮生法師法國を慶世りて山所ふとゞめ此所にて
安置し法然上人の廟蓮生の塔は本堂のうしろの山上にあり石塔へ
阿弥陀堂の後ふあり　て方丈は御鉢釋迦佛を安置それ
當寺の草創は法然上人の滅後十七年ふあらして慶山の衆徒念佛
宗の繁榮をそねみ　狼藉をなすの故法然上人の選擇集を破しして
彈選擇集の并擬堅者定照房といふその著し隆寛律師のもとに送る隆寛則
其答ふ顯選擇集と述ふ　依て海の饌案のあらざるまを暗夜の礫のごとく書て山徒大ふ憤ふこと塔ふ舸流し大ふに
蜂起して圓基僧正ふ後し奏聞ふ及ふ隆寛ふ遠流ふせしふ又
上人の墳墓を破却せんと評義まちまちなるの故徒勞まれ

聞て大ゐに歎き佛壇の後ろへ入てみるに石像
を堀出し眞如上人所持の弘像なりとて奉遷坊のかた
遂る眞如年安貞二年正月ふいとりて上人の石像より光明かやき
しくぐ来迎坊あやしと光のさす所を掘ふかくして奉うつ造の南のさと
栗生野れやうりの至る則山所に住る幸の孫兒佛のそやをかまり
て眞如佛なるふ幸阿弥も不思議の霊告ありてまれ有合ぬまう上人
の御弟子奉うゐ指を栗生野にうつして堂坂圓うそれより上人の面見れ
ず有りおめ〳〵則當寺の山腹におのく茶毘を時ふ忽然うして紫雲堂
ふゐるびに異香四方に薫じ則舎利を拾うて廟堂を造立一澤土
一宗の宗廟とうた業を慶ひし所なりそれ紫雲杜とるがく今
勢ありて當寺縁記の意をとうる
惣して當山の旧跡の地ありて山林の境ごい宝閣そびへ常行念佛
の聲うんで講堂ふい一石巻をひうそて真如の月を探う秋葉園う
風波ぬそ黄金を布の紙陀園ともひつぢ

當寺の本堂は近代の建立なり始好比類うく後代造立の規矩しん

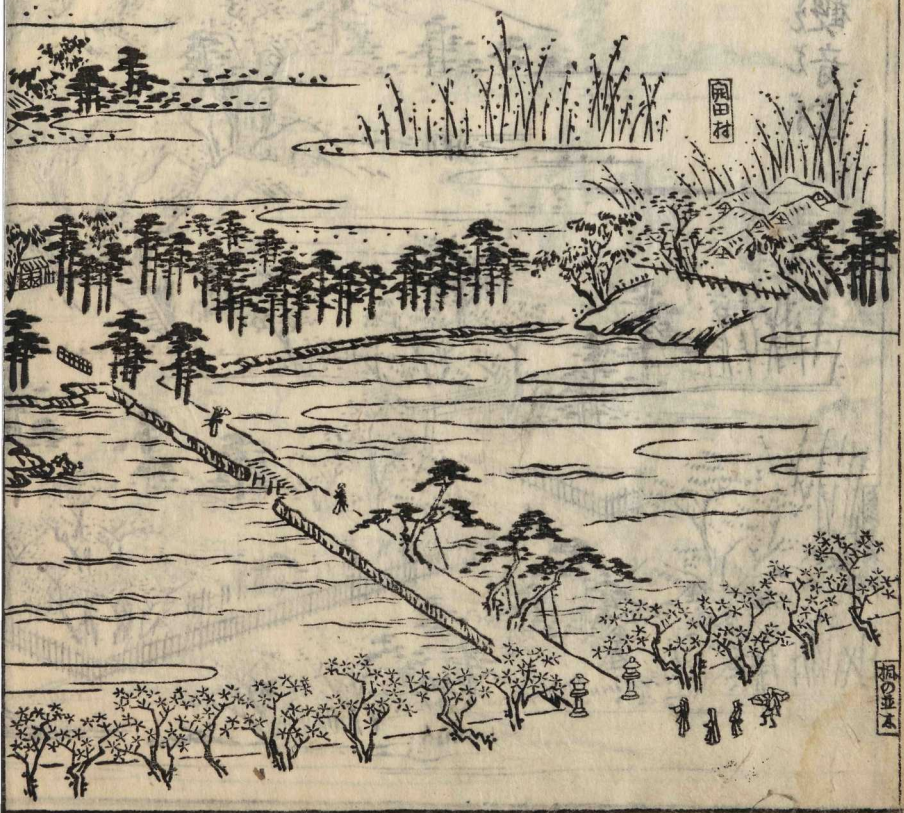
奥海印寺寂照院

揚谷観音堂

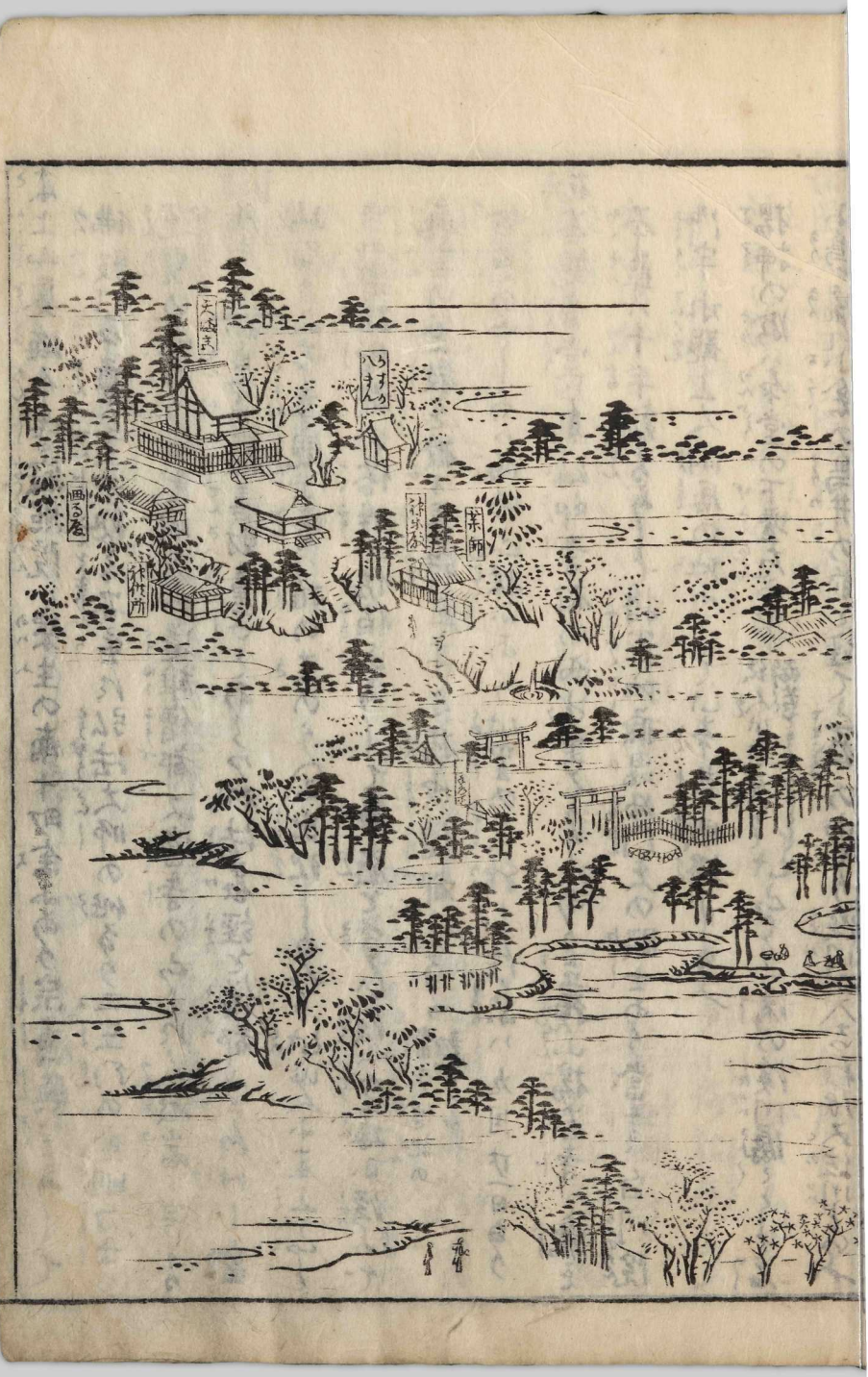
長岡天満宮

長岡や
田つくれ
いその
あれ
さくら
秋さめいさよ
鴨の羽うち

西園寺



桐の並木



本上山奥海印寺寂照院ハ栗生の南十町余ふあり宗肯ハ真言みゝて
佛殿ハ本尊ハ千手観音安置弘法大師の作なり二王門の金剛力士ハ
運慶の作なりとぞ開基ハ道雄僧都又當寺の奥に人骨破岩と号する
所あり妙見菩薩善財童子とあらわれ法華經を僧都ふさゝけ靈
嶋なりと本尊観世音ハ椎の木のうつほふ出現しゆへふ本上山と
いへり道雄僧都の俗姓ハ佐伯氏みゝて華嚴を学ひ後ふ空海ふ従ひ
真言の密教を授ろ嘉祥二年ふ椎少僧都とろう當寺傳記の
妙見のやしろハ西の山林ふあり山里の氏神とろ九月廿一日ろう
柳谷観音堂ハ奥海印寺村の西北里ばかりにあり立願山揚谷寺と號を
本尊ハ千手観音みゝて將軍地藏毘沙門夫の脇士あり當寺ハ白川院
御宇永観上人開居の地みゝて山本尊感得しゆへ
揚柳の脇ハ本堂の下壇左おあり俗人ハ所ふ入そさゝろ二流の渓川瀑ゝて石
ふ鳴て流れ小舎の鳥井の前を経て谷の少し深川ふ入これ後又位川ふ入

長岡天満宮ハ岡田村より西ニあり當社ハ天満天神宮の鎮座にして
神殿の額ハ霊元帝の宸翰と社記ニ曰菅亜相左遷ニ
あひ給ひ暫く山城の賀をこえ給ひより菅氏東ニ移祐房ら
その山地を選ひまうけて神位を移しみそなはし菅亜相ニつき
尊容をうつし祐房ニさづけ給ひ後ニ小社を営て長岡天満宮
と崇奉る
社頭の道の左右ハ池塘廣くして風生じて細浪漲り薄茂りて
魚鱗かくの汀ハ紅葉ふくみて水の面に夕陽紅ニ秋の雲低
踟躕を風ニいちぢるし
鞆岡ハ岡田村南ニあり
神道百首
いくしらぬつのさし紙のれ葉ニ書て奉らんと思ふ心ハ
清少納言枕草子ニ
とも紙ニかきつけむとするにおのれ書ニくき所あり

山崎
離宮八幡宮
寶寺
觀音寺
八大天王

山崎谷九観音

大山崎天王の社の素盞烏の御子八王子を鎮座しまつる也鳥居の額ハ小
野道風ぬきがき山崎郷中の老ゆるに例年四月八日より神輿二基を
當社勧請の年代詳ならず神殿梁の銘に曰養老二年再興と書しと今執
行ふあり天王山の嶺の文明二年山名是豊赤松一族上洛して此像を築く
観音寺ハ天王山の東半腹にあり真言宗にして佛殿の本尊ハ秘仏なれ
ど立像聖徳太子の御自作祖師堂ハ弘法大師の像を安置し本食以下僧正
中興して今の如く再建あり當寺の客殿より淀八幡の風景眼下に通
寶寺ハ観音寺の南にあり補陀洛山寶積寺といふ真言宗にして本尊ハ
十一面観音の立像にて聖武帝行基大士の為に御自作堂内の賓頭盧の像も
聖武帝の御持仏三重に塔ハ大日如来を安置し當寺の什寶におさめ
妙喜庵ハ寶寺の麓にあり禅宗にして本尊十一面観音
山所小径にして二町ばかり登れば茶亭あり
山崎の橋ハ秀吉公ばかりの後にあり今ハ
舟渡しありて桂川の流れにのぞみて人家西南にうつりて今ハ橋なし

離宮八幡宮ハ後住還の中ホあり鳥井の額ハ行成卿の筆ニテ殿ホハ
八幡ニ天を崇奉りて社壇の下ホハ石清水湧出ル 左右ニハ末社
祇相ホ異ニシテ 他ニ比類なし 若宮のやしろ武内ハ本社の傍ニ
當社ハ貞觀元年四月十五日行教和尚宇佐宮ホ詣で八月九日帰洛
しホ御ふねの時ホ神老出て和尚ホ對し去ル七月十五日夜山ホ神の
現ニ形ニ猶のめ 人猶尉の木陰より清水ハつき出て異香薫じ行教
これ仏天聽ホ達し勅を奉て清水ホ神殿を造営しのち
離宮の名ハ當社鎮座のはじまりより弘仁帝の御時夜泊しゆへ仏所の
離宮ニなりより此宮室ホ移しゆへ離宮八幡と稱ス
天滿宮の社腰うけ石ハ筑紫ホ在りしホ菅公所ニ依ホ和ホを祭ル
大鏡
君ニそむき家ホ捨られしものゆゑにやうみ一ゐ
ホまでにのこりみ一ゐ 菅贈太政大臣
宗鑑法師の出居の地ハ天滿宮の傍ニ 宗鑑ハ足利義尚公の侍童ニて俗称ハ志那ホ言
範永といふ連句ホ長じて世ニ聞ゆ
関戸明神ハ山城摂津の國堺ニより一山所ニ関所あり関戸院と号ス今ハ
町の名ニのこりて関戸町ニ一谷の絶まハ山町の南ホあり 圓法禅金の像を安ス山中ニ滝あり